

みんな幽霊になった

!!



島さち子

みんな幽霊になった

装  
画

島  
さ  
ち  
子

みんな幽霊になった

1

亡くなった誰かの父、亡くなった誰かの母、亡くなった誰かの友だち、みんな幽霊になって足も無くただよっているにしても、誰ひとりあおぎめないほど、ここはごったがえしている。

眠り足りず起きたばかり、時々あくびで目鼻がなくなり、顔がただの点になったりするが、よろめくと、他人にぶつかり巻き添えにして、跳ね返えされるから眠りに陥らずにすんでしまう。わずかに気がかりなことがあっても、忘れていることからの堆積に妨害されて自分自身にとどかない。

誰かは急ぎ足の人に押され遮られ、時間に間に合いそうもない。途切れなく続く人の群れは、二つ

の方向に分かれていくが、その誰かは、思いがけなく反対側へ横滑りして行って、戻る力を完全に失っている。

すべての人の路面に対する鼻の位置、隣りの男の鼻の位置、その隣の女の鼻の位置、その隣の男の鼻の位置……誰かの鼻の位置、みんな一つの鼻輪で結ばれる。軽く引つ張られる鼻の痛みにも、こうしていけば人並の飼料にありつけるといふ安堵感で、地下へぶあつい重い流れになって崩れ落ちる。

みんなは、もう離れ離れに鼻をおくことが出来なくなっているが、連なっている一本の太い綱がゆるむと、共通の一つの鼻で大きな吐息をすることを拒否し、こっそり小刻みな自分ひとりの息を吐いてみる。

——ただいま、皆さま、ご出勤途中の大切な時間であるにもかかわらず、かような事態になりました。恐縮致しております。押さないで下さい。この事態は、皆さまご承知の通り、彼らによるのでありまして、われわれの闘争によるものではなく、誠に遺憾に存じます。

このまま、しばらくお待ちください。もしここで、あなたが押し殺されでも致しました場合、ご家族がいかにしてお嘆きになることでしょうか。文句がございましたら、彼らにおっしゃって下さい。……なんだって？ そうか……押さないで下さい、押すと、押したあなたも踏み殺されます——

駅のアナウンスに誰かは耳を貸してはいない。鼻輪のわずかなゆるみのなかで顔を動かす。何が見えるわけではないから、こんなところで、思いがけないことに、亡くなった母が今生きていたら何歳になっているかを考え、数え始め、数えるうち、うまくいかなくて止めたくなり、放棄するが、再び

それを数え始め、すぐ止め、いらだたしいほど強制的にそれを繰返し、振り払うことが出来なくなってしまう。

しかしここは、群集のなかだから、ぐいっと圧する痛みが突っ込んで、途端、さっと別の想念に転換し、誰かは、いま履いてきてもいない靴の、踏まれてついたキズのことを執拗に気になり、想念のなかで擦りはじめ、自分が靴でもあるかのように受動的になって、どうすることも出来なくなる。誰かは上体だけ傾く圧力を受けて斜めに立つ。いきなり母の今いると仮定した年齢が簡単に数えられ、ついで父のその年齢まで計算でき、いままで、こんなことで一度も悲しんだことがないのに、父母が人並に長生きをしたとしても、もはや、いくらかも生きられない年齢になっていることに気づいて悲しむ。

しかし悲しみは実に短い間に終わって、それどころではなくなっている。誰かの前にいるのは男であり、男の身体は大きな岩盤だ。誰かはその間で挟み撃ちにあって、肋骨が、いまにも折れそうにたわみ、肺は変形させられ、空気を精いっぱい吸い込んでも、ドーナツ型に小さく膨れるだけだ。肘でそれだけの肺の膨らみ分をささえて、誰かは奇跡的にじりじり動き、岩盤と岩盤の間を出て、もっと狭いひとひとの間にはまりこむ。誰かの前後とも女で、誰かは肉と肉の間にいる。前と後ろですこし肉を押し退けて変形したドーナツ型の肺が、小型だけれども輪ではなく丸い形を取り戻す。

——皆さま、たとえば、一分早く会社に到着できたとして、あなたにどれだけのお仕事が可能でしょう。たかが知れております。明日もあり、明後日もあります。あなたが気を長く持つて無事であるか

ぎり、何時でもゆうゆうと、とりもどせる時間に過ぎません。それよりも、こうやって群集のなかに押し込まれて一步も動けなくなったあなたが、今何を考えるか、そこに意義があります——

ボワワワ、という笑いがしまりなく雑音にぼける。みんなの縮んだ肺のなかに、含まれている空気はもはや乏しくなっているのだ。足はほぼ棒切れになって、ときに一步でもひとに先んじようと用意する者がいると、節を大きくし、曲がり目をごりごり押し付けて骨折になる準備をはじめ。これほど体を押し付けあっている頭の上は、人で埋められている部分の数倍以上の空きがある。こんなに大きい空き箱を頭の上に乗せて、つぶさないために、誰もかも、不当に窮屈な思いをして耐えている。来もしない電車の匂いが変なクシヤミになって走ったりする頭上だから、人間だって一人や二人ゆうゆうと歩いて行つてよさそうだ。

誰かは足に押し付けられている熱い塊のあることに気づくが、それをよける隙間がない。熱は風呂敷ほどの布を通して来るが、何の熱さなのかわからない。始めは圧迫感と一致する程度の熱であったが、しだいに毛穴をふさいで体温を内側にこもらせるあつきになり、外側から熱せられて、皮膚が白い編目になり、ブツブツ湿疹状に熱が拡がり筋肉のなかで沸騰して来る。誰かの足はたまらず前の足を押し動かすが、その熱さは突起して足にくっついてきて振落とせない。震え、痛くなり、火傷から赤い血の滲み出るのが自覚できるようになると、熱さはふつと零下数十度という冷たさに変つてしまう。ぴんと背筋を伸ばしつきりにし、いつもの十分の一にもならない小さい呼吸を、何回もくりかえし、しだいに浅く、しだいに細かく。

そのとき、誰かの鼻があつて、前後の女にも、男たちにも鼻があつて、鼻につながれた綱がびんと引つ張られ、引つ張られすぎて前のめりに、更に地下の階段に落ち込み、踏みじり、積み重なり、空隙を全部うずめ、ひとびとのありつたけの姿勢が一時にかたまり、一つになって、もうすでに一本の綱に引かれる牛一頭にすぎない。彼らは電車に引かれて走る、電車は大きな牛のろい歩みに引かれて、速度を落とし進まなくなる。

誰でもない、折り重なつて詰め込まれていく奴隷の貨物船とおなじだ。死ねば何のエサになる。まごまごしていると殺される、誰かの瞳孔が開きっぱなしになったら、その小さい穴に逃げ込むのだ。狙つておこう。つぶれる、もうすぐ我慢できなくなる、すぐ吐いてしまう、気を失う、我慢できなくなる、やはりおなじこと、我慢できなくなる、ちつとも変らない、もうすぐだ。

肩に服が密着している。回りのひとの服を全部自分ひとりで着ている。ちがう、何も着ていない、自分の服も着ていない、周りのひとの方がよりびつたりと、こちらの服に密着している、彼らが着ているのだ。自分はまったく裸、柔らかな肌がくぼみで震え、四方を見回して竦んでいる。隠れよう、隠れている、自分の服を着ており、周りのものの服まで着ている。汗が滲み出る、周りのものの汗が混じりあつて、同じ温度に溶け合い、自分の膚など何処にもない、棒になった骨から、蜘蛛の糸のようない筋がまだ繋がっている自分の肉を、周りのものが着ている。

もうすぐだ、倒れてしまう、棒になった骨がどつちにも倒れるというのだ、八方にしか倒れようがない、周りの者が、自分の骨をアクセサリーにして飾っている。かすかに暗い一本の傷跡が自分なのだ。



もうたまらない、傷跡から吹き出すなにかが、もうすぐだ、駄目だ。じっと動かず静かにしていよう。動けない、重い、厚いものを着ている、肉を着て、膚を着て、服を着て、周りのものの服まで着て、周りのものの肉を着て、骨を飾り、その向こうの者の着ている服まで、ありったけ着こんで、車体まで着こんで体中で震えている。

最大限に押し込んで、死亡者が多くても純益で稼ぐ奴隷船である。生き残ったのなら、太らせる方法を考える。生きていることが滑稽過ぎるから笑われて、みんな誰とも大まかな繋がりがさえないと思いついてしまう。本当はみんなが生きること、駆り立てられているので、こんな場所に動かないでじっとしていることは出来ない筈なのだ。動き続けて行こうとするなら、どうしても決定的な、態度をとらなければならない。やっぱり、みんな自分に閉じこめられてはいないで、もっと貪欲に巾を増し、太ってしまうことを選ぶ。

周りのものの服を着込み、皮膚を着込み、肉も骨も、その周りのものの服も、皮膚も、肉も骨も……、ためらわずに、無我夢中に着込んでしまう。自由に開いている空間に放り出されているところまで太り続け、迷いから覚めるような一瞬、一つの命を越えた、もっと大きな群衆を一つにした命に、全幅の信頼をおいてしまう。もうすぐつぶれる、もうすぐ倒れる、しかし、最早大きい一人にとって、細胞の一つ一つのざわめきにすぎない。身体はたしかに重く、ちっとも進めない、一人ではなくて、やっぱり巨大な一頭だ。これくらい大したことではない、いつか全部ひとつに凝結してしまうのだから――。

駆け出している、時間や仕事からの脅迫観念、人真似の魔力は個々の中にあるどんな批判よりも強力に、嘲るようにひとびとを引っ張る。

本当は、どうだっつかまわないのだ、いつだっつて微笑を浮かべることができるし、疑うことができるのに、誰一人それが出来なくなるということ……。駆け出した競争は次のホーム迄束になった曲線群で駆け抜ける。この駆け始めにおいて、ひととひととの間に挟まれて、足が地につかずに浮き上がって何人かが、どんな倒れ方をし、踏まれ、飛び越えられたか、倒れた者に躓いて何人転んだらうか、一瞬心をかすめはしても……。

少しずつ放出される意識の量は、誰かにおいて、いつか蓄積され、しばらく後に引き出されるとき、びっくりする重大事件になって再生され、冷や汗をかいたりするのだ。

ある部分では駆け出すというほどの勢いで駆け出せはしない。空間に制約されて歩かずに運ばれさえる。線路にこぼれ落ちるといふ一つのルールの裂け目がなければ……。線路にこぼれ落ちる。足許が限定された空間から徐々に抜け出て広がる、それは不意の出来事で、とるものもとりあえず飛び出したという様子で走る。誰かは自分が何処に行こうとしているのか、分らなくなってきた、あらゆるものに怯えはじめる。両側は線路の陰気な鉄錆びに背を向けた家々が、こちらに窓一つ見せず、前方はともすれば突進してくる車両に端から、粉々になりはじめており、後方は、もはや、永遠に逆戻りできない到達不可能なところに変貌して、しかもそこに起ったなにかが、こちらに向かつて、全力で疾走してくる。誰かはこれだけ多くの群集といながら、まるで海水に投げ込まれた瓶のように、不

確かな不幸に陥ってそれでもどうすることもできず、人々の後ろを駆けるだけだ。

2

ともすると今日が遠い日になってしまい、その足が斜面だと気づかないジグザグをして坂を下り、見通しの悪い地点にいる。逆光で、身体が銀色の線の輪郭だけになった黒い誰かたちが、銀色の線の間隔を縮め、一つになり、横の連続模様を描き、模様が崩れか細くなると、線が黄色に変わって蘇り、片側の輪郭だけになって太さを増す。何処から来る光か、両足だけが茶や赤に彩られ、誰かの目の縁に多少の爽やかさが流れてくる。肩にアコーディオンみたいに畳まれた腕がついているのに使えない。格子が目の前でぐいっと回転して行く。

——どうなっているのか、前の方で知っている。勿論誰も良く知らないかもしれないけれど、行動も伝染力があるから楽にどうにもなれる——

挑発する警官の足音が駆け抜ける。Uターンして再び駆け抜け、更に逆もどりして駆け抜ける。輪郭の曲線がほどけ錯綜してきらめくと、みな藪にらみになったように、別々の方向から声を聞く。

——名前を言え、ここは誰の通路だ。その袋の中に危険物がないと確認したら……

——彼らの支配的意識の位相の……権力の理解し得ぬ地平で……タタアタタア、タタア、惰眠をむさぼる頹廢より……我々自身を突き出した、タタア、タア、露骨な挑戦、タア——一斉に、故障したような話すりズムだけになってしまふ。

——近づけるだけ近づく……生半可はいけないな、見過ごすな……奴等を裸に、全部筆り取っても構わない——断片的に、時にははつきりと近くで、大勢の誰かたちが話している。みんな確かに居ながら、つじつまの合わない奇怪さが、夢の中のように払いおとせない。誰かのシャツのボタンは三つもすでもぎとられ、ひらひらしていて、時々シャツの裾をスラックスの中に突っ込み直す。

——死ねっていうのね。おまえこそ死ねって言ってるんだね。違いわ、ママこそわたしに死ねって言っているのよ。死んじまうからよせと言ってるんだよ。覚悟の上よ。つまりママに死ねって言っていることになるんだよ。違いわ、死ねって言うことは、わたしの生きる力を失わせることなのよ。お前が殺されることは、わたしと一緒に殺すことになるんだよ。ママがわたしを殺すことになるんだわ。離して、離さないよ。大丈夫よ、大丈夫なんだったら。危ない、死ぬよ。死なないわ。ママを殺すんだね。違う、違うったら、やつらのことよ。あのとき。もうあれっきりママの顔を見ないことにしている——

どんな音も湧き出していて、話し声が消されると、同じ声がもう一度反復され、ついに挑発する警官の足音で完全に消されてしまう。遠くでズシンズシン響く銃声、ずっと向こうから集団の解体が始ま

っているのかも知れない。逃げ出して行く赤い炎のほころびに聞き耳をたてて驚き、迷い、こちらでも崩れる。妨げる人びとは、何も言わないと同じ、互いに打ち消しあう言葉を放ちあって、全くあきれ返るほどの数に増加しつづけ、誰かが指さす方向に警官たちの靴音は曲がって駆けぬけ、副渦を幾つとなく従えた渦となる。

何が起っているのだろうか、誰かは確かめようとするが、伸び縮みする肉と、たわむ骨で出来ている人の群れは、どろんとした粘液のように両肩に粘りついてくる。

見物か、仲間か、敵かも区別できない。人々は急激に殖えて、厚い一続きの粘ついた波動は、揮発性のガスも発散しているが、皮膚に重量感を持って押し寄せ、さらに流れ込む人の群れが幾つかあって圧力を高めて行く。ちよつとした不注意で、誰か自身そこにいることを忘れているうち、なかば現実の生き物でないかのような、見慣れないもの達の真中にいて、一団のようにぴったりとくつついている。付近に限って言えば、恐ろしくシーンとしていることを知り、息をひそめ、これから起るもの、ここに突っ込んでくるものを待つ。もはや背伸びをしても、四方、一色の人波しか見えず、攻撃して行く群れもあり、逃げ帰る群れもあり、すねを蹴られ、血のりで汚れた者もいるが、上空から見れば、ひとつづきのまま、広がり、すぼむ、巨大なアメーバの動きかも知れない。誰かは原形質の粘度の大きいゲルから、流動性が大きいゾルの状態に変化するのを待っている。

飛行機の爆音が居座って動かない。平らでぼってりした人ごみを、誰かはときどき顔を水に突っ込むように沈み、息をつくように浮き上がり、ただ何かを待っているだけだ。これを楽しむこともあり

得る、力関係はどうなっている。ずっと前に、あるいは今、何処に居るとも知れないどこか遠いところで発せられている誰かたちの声も警官の怒声も、妙に、タア、タタア、タタア、タタア、言葉のわからぬ、壊れたリズムで、何処からも聞こえている。群集は、いつ、どこで、暗誦したのか、そっくり同じ、言葉のわからぬ壊れた騒音を外側に吐き出している。高熱の発するヒリヒリした匂いが地を這う。こうなってしまうては、全部の誰かはここにおいて、逃げ出してしまったと同じになっている。ひとりひとり、目につく形なんか何処にも見えなくなっているのだ。

殺到する群衆はくぐり抜けていき、くぐり抜けた群衆の間を、次の群集がくぐり抜けていく、つまらないうちに、その誰かの気持ちは、簡単に取り替えてしまうことができる。さっきまで石を投げていようが、肩を組んでいようが、簡単に傍観者に変ってしまうことができ、この光景をどつと笑い飛ばすこともできるはずだ。

——あっち——こっち——手のものを振りかざし襲う警官たちを簡単に方向転換させることができる。何か月たっても、何ひとつ変革できない者たちにはその意志がないのかもしれない、徹底的にやっつけることのできない者たちには無気力で無駄な活動をしているのに違いない。演説はいつだって何処だつて、聞こえなかったのかも知れない。誰かが、誰かと反射作用みたいに領いて、ほかのすべての者たちと同じように肩を組んでしまっている怪、奇怪でもなんでもない。何時だつて意味のない音や色が、迷子になるきっかけになり、迷路を抜け出るきっかけにもなっている。

——やつらの方がずっと多いよ、やりたいものがやればいい——くたびれきつた言葉がこんなとこ

るまで入り込んでいて、何かに到達したように急に誰かに作用し、誰かを憤りだけでもどらせる。現実の場所を飛び越えようとするが、そんな違った場所は急に現れない。やはり、こんなところでも紋切り型に、時計は一緒に刻んでいるし、ひよつとした加減で、自然に生れ出る温かみのある声で、痛みを拭うことも出来たりして、人間であることがむずかしくなったりはしない。

暗くなる。全面的に停電している。光はどんなに強くても、太陽の光でさえも、ほんの小さな束に過ぎないらしい、生き物は暗さにもっと慣れるべきだ。眼に沁みついたものを流し落せばいい。視線の完全な充実がある。こんな中にいて、どこもこれも全部見通すことの出来るかたちに開けた暗さの遠さ、途方に暮れるほどいた群集は誰もいない。誰かの左斜め上を、右に向かって進んで行く爆音は、絶えず右に進みながら居座って、その反対の後ろにも、僅かに前方の音より遠く反対の方向に進んで行く爆音がつきまとう。時々、すつと刃物のような光が現れて、暗闇に消えていた群衆をどつと現わし、素早く切り刻んで行く。

一段と深まった暗闇。暗闇とも限らない。ここより上、もう少し上、もっと上、上に行くにつれて、いくつかずつ多くの灯りが見えているに違いない。いたるところから出ている音の全部を、次の爆音が消しながら近づいてきて、またそのまま、地上に向かい合って居座る。誰かは、自分の周りにある総べてのもの（味方、敵、野次馬、爆音）によってしか説明できない自分であることがはっきりして来る。誰もかも、何もかも、自らの放射するものによって空間の容積を満たしている。誰かの部分がかんなに狭まっても、他のどんなものとも容積を共有してしまっているのだ。じっと見ればここ

に充たされている媒体のリレーし、コントロールする働きかけも見えてくるかもしれない。自分の居る場所から、誰かは爆音の高さまでのぼり、遠ざかり、いまいたあたりを眺め、ずっと見下ろしつつけ、見えないことや、見ることに飽きると、素早く帰って来て、同じ場所に再びいる。走る。止まる。ご苦労さん。そういう、彼らに、ご苦労さん、そう言う。見切りをつけてはいけない。市街を全部戦場にするんだ。一せいにやつらが並んでトンネルをつくる。突っ切ろう。ぎくしゃく言い訳をしている誰かがいる。うろちよろするな、さぐれ、ぬるぬるする——。鈍い音のする、薄れた感覚のなかを、激しく動いているうちに、なるようになって、確実に、そこに、やぶれ服の誰かがいる。さまざまな色合いを持つスペクトルのように、光と散った物体がある。その下とその上は、見えない暗闇に消えている。

誰かは他の誰かたちのかかわりのない、ただのひとりであって、ひとりでありながら、無限の痛みに襲われているのだ。内側も外側も、痛さの数ほど叫びをあげきれない、叫び声そのものが痛みに変わるから、誰かは、やはり沈黙している。どの痛みも重なり合って、痛みに張りつく痛みである。誰かは乾いたマツカサのように鱗状に重なった痛みを開き、剥離し一片ずつ投げる。四方の窓を開け放ったままの建物が、いくつか、夜の光に透かして見えるが、それは、窓を開けたのではなく、細い窓枠だけが残って、綺麗さっぱり、ガラスの破片は素早く片付けられているのだ。僅かに通行する者は、誰かの前や、後ろの、むしり取っても無限にある痛みの中に混じり込んで、遠ざかってしまっても何時までも、誰かの痛みに居残ったままだ。



——巻き込まれたのですか？かくれんぼの名人になることですね。

見物するには、危ないところで、ぱつと隠れなければ。見えましたが全部が？……でしょう。知るために見にいっらつしたのですか。知るため？

この場合、完全武装しなければ、来なくとも、想像で、大部分間に合うものですよ。痛みで結びつけられる仲間がいるはずだが、そんな連帯性は、ひとりでさえ裂けそうな痛み of 性質上不在なのだ。実際、ほんの少し時間が移行したところで、確かなこととしてここにあるのは痛みしかない。人間だからといって、虫よりいくらも死に難く出来てはいるわけではなく、誰かは何となく生きにくくなり、無限にある痛みを一所に集めようと、高すぎる悲鳴をあげ、強張らせた頬でうけとめるが、すぐ額の方まで散り、むしろ全身で共鳴して悲鳴をあげるだけだ。

誰かの眼はくぼみ、くぼみのなかで視線をのぼしている。そのすみに小さく写っている白いものは、かたちが明確ではない。これを分離して拡大しようとすると、全部が縁からほどけて崩れ、境界をなす表面を持っていない。しかし白いものは、いったん崩れても、総てもとのところに戻ってきてしまう、閉じ込められ脱出できない何かなのだ。白いものは誰かの家である。思いがけないことに、庭の木々の葉に、おびただしいクモの巣が、葉という葉を包みつくしているのだ。身をひそめ、身を守る狡猾な偽装の木々。木とはいいいにくい軽い空気のなもの。

そうなんだ、空気のなもの、白い煙が、戸、柱、屋根のすきまから、もうもうと立ちのぼっている。家のなかにいる不機嫌な住人に片隅に追いやられ、外にもれてはいる煙草の煙かもしれない。

違う、誰かの見ている庭の木々の葉の全部は、思いがけないことに、毛虫に食い荒らされて、白い葉脈だけがぼうぼうと立ちあがっている。生えていたコケさえ緑を失って、ただ真っ白な石垣が何処までもつづき、白い葉脈だけの木々が、その白い編目のなかで、風もないのに、空気がそよぎ、ヒュウ、ヒュウと、かすかな音をたてている。門はある。見えなかったが、同じ場所にあり、入ると、石がごろごろしており……といっても、石はその場所から動いたことは全く無いと言わんばかりに、土の中にいくらかずつ陥ち込んで坐っている。持上げると、幾種類かの虫が、模様のように溝をつくって住んでいて動き出す。ナメクジは鈍い動きのうちに灰色の虫の上に乗って運ばれて行く。

急に悪天候の息づまりが誰かを襲って、茫然としている誰かを、適当な場所に片づけ、口を大きく開けた雀の顔が見え、騒音が、どこからどう言う経路でくるのか分らないまま入り込んでくる窓辺で、カラスが、幾冊も幾冊も、本のページをめくっている。明るくもなく暗くも無く、蒸気が込めているように半曇りの影のうつらない壁をもつ家。

一日待ただろう、数日待ただろう、本当は誰でも蔭に住みたい。体をちぢめて、居たいと願う総べての隅は、まんなかと同じにぼんやりして、しっかりとくまってくれそうにない。誰かのなかで、目玉が口のなかに、歯が胃袋に、脳が下腹に、上の方は空になって、唇の開け方一つで、白い光も紅い光も、しぶきになり、オーロラのような幕となって、誰かの見たことのない場所に押し出されてしまう。

これはたしかにあのころのことだ。一週間前、二カ月前、三年前、そのどれか。

見覚えの無い男がじつと動かずに誰かを見ている。誰かははじめ、痛みが自分をからかっているのに違いないと思ひ眼を閉じる。二度目に男を見たとき。男は頭を動かして頷く。このときから痛みだと思つていたものが、妙にいじけて、誰か自身がつくった装飾的なまがいものになつてしまふ。しかし誰かが手で掻き混ぜる空気は生臭く、まるで鼻のそばがひび割れて、中身が現れ、そこから泡をたてて湧き出すかのような匂い。我慢できなくなる、吐く。

——話すな、お前の話は、あきれ返る雑音、くたびれる——男は言つて天井を指さす。天井はすぐそこで、たるんだビニールのような明かり窓が小さくあいている。透明であるらしいが、空も、家も、木も、何ひとつ見えず、誰かは恐ろしく強い重力に引つ張られた、死んだような時間にいる。もう、死んでいるのかも知れない。底に寝ている誰かと、腰掛けている男の間の無限に往復する視線の錯綜、ふたりの間には、近づくことの出来ない空間がある。視線は誰かの表面で、あるいは男の表面で反射され、戻り、再び行きながら、反射され戻つてしまふ。さつき、ふたり一緒に感じたらしい生臭い臭いさえ、なくなつていて、物と物が対しているような仮死状態にいるのだ。ここが決して動けない位置ではないと信じたいから、一回の視線の往復で、一つの意味、二回の視線の往復で、二つの意味、無限に続く往復の間に、無数の意味が、ふたりの離れた距離の間で、勝手なかたちでイメージ化していく。誰かは男が、そこにいる直前にいた位置、その姿勢、顔をしることができ、その直前も、そのまた直前も……、男が位置した無数の場所、その姿勢、顔を知ることができ、この空間のなかに、男を無数に重ねて配列でき、また、男のこの次に変えようとしているそれを予測することができ、その

次も、その次も、無数の男を空間に配列できる。視線の往復運動のうちに、男がぎつしりとつめこまれ、あたりは男たちでいっぱいになってしまふ。それは一瞬一瞬の、静止した時間の男ばかりで不動であるから、ぎつしりでありながら、男たちのなかに摩擦で発する火傷もなく、圧迫で潰れる細胞もない。無数の表面だけの男たちは、ただ誰かひとりをめがけて激しく押し寄せ、耐え難い重みになる。もう、耐えられない。死ぬ。誰かを救う役割は誰がする。底意地の悪い企てのように、貼りついてくる者たちを、誰かは、次の視線の往復に持っていく、輪郭を補い合う連鎖した男はこの部屋のまわりに群がって、襞のある縁飾りのように誰かを取り囲む。誰かは捕縛されようとする自分から反対に攻めたて、再び反射して戻って来る攻撃を、すばやく押し返す。気圧が次第に低くなるにつれて、男は気体のように肥大していく。誰かは男までの視線の往復で、このことを確めている。男は顎が二重になり、次第に首と顎の区別がなくなり、足は赤ん坊のようにくびれ、胸と背ではりさけそうだ。やはり、ほころびはじめ。喪章のような黒い肌がこちら側と、あちら側で裂け、裂け目と裂け目はお互いを見ない方向だ。やつらのひとりではないか？ 誰かは肥大した男に場所をとられて、限りも無く薄くなる。ようやくコツンとバウンドする。視線が肥大した男の体を叩いて跳ね返り、急降下し、——いつも生の極限を忘れないでいる為に、痩せ衰える……男は底に打ちつけられ、跳ね返って、天井の明り窓にとどき、何か口ごもる声をたて、破れた背中を見せ、もう、同じ白い小さな四角の窓を残して、いなくなっている。

見つめることを、遊びのうちに解消することができ、意味することを、また遊びのうちに再生でき

る。本当はそれを欲しているわけではなく、自然にそうなってしまう。払いのけられない視線そのものに働く微細な力が、結果的に自分の意志によるもののように錯覚するのだ。だが、男は確かにいなくなっている。

男の影が通りすぎでもしたように、上にある窓が暗くなって明るくなる。上に窓があつて四方にないのはおかしなことで、この部屋はともすると横倒しになっているのかもしれない。もう一度、小さい明かり窓に影がすぎ、まるで砂の滝が落ちてきたような響き。誰かは惑星を追うように、このなかを見るために頭をまわす。耳のなかで鳴いている音ばかりで、そこからの意味のありそうな信号は一つもつかまらない。床が斜めになり、すぐ反対側に斜めになり、持上げられ、血液が一所に集まつていき、誰かの首を横に振りつづけるほど揺れ、激突でもしたように片側から落ちる。ガサガサ音がして、窓が赤く染まり、壁が床にかわり、誰かはつかまる場所を見つめる暇なく落ち、天井が床に変わり、誰かは落ち、明かり窓につかまる暇なく壁に落ち、床に落ち、手足がばらばらに側面の壁に落ち、その反対側へ逆さに落ち、結局、隅に誰かの四肢が重なり合つて、止まる、窮屈な形でその隅のまじわっている三つの面に挟まれた体、誰かは、どの面が自分を支持してくれる床なのか迷っている。床は、迷うことでも選択することでもなく、決定してしまつたことだから、間もなく底になっている面に落ち着く。これと同じ動きが、もう一度連続して繰返され、そのころは、誰かも何とか体を打たずに待ち構えた動きに乗つて位置をかえることができている。

——テーブルの上でどんな手順で箱を回転させて包むか。男は普通の箱が何面体であるか度忘れし、

二面少なく、紙で蔽って疲れて止める。これは箱で誰かごと包装紙に包まれているのだ。始め白かった明かり窓が薄暗い。こんな来かたで夜の来たことがあったか。これがもし拷問だったら、早く問いを発したら、よさそうなものなのに、打ち身の数がもう数えきれない、全身が打身の色になって、どこが打身だと見分けることもできなくなる。

通りの両側に家々が、多分正面を向いて並んでおり、二、三メートル巾の歩道が続いている。これも夜中になると、ほんの一寸した風にも、遠くから何かふわふわとした細かな粉が飛ぶものだったろうか、柔らかい歩道が花粉にまぶされて温くんでいる。

その人物の、手首しか見えない。街灯は、夜になってから何時間も経つたために、照らすのにくたびれ、何一つ形を明瞭に描き出さず、ずっと離れた場所を、円にしているだけで、その手首までは、遥にとどかない。手首から下、それがどうして、何によつて、こんなにもはつきり見えているのか不可解だ。その手の握り方、力の込め方、進み具合に変化はみられない。手は赤味を帯びた大きな手で、手首からホウキ状に出ている骨、その先の握っているために丸く飛び出した関節、その先の曲がっている指の関節、不細工に張りついた皮膚の内側で、ありつたけの力をこめて、大荷物をもっていく。白地に赤い模様の包装紙に包まれ、黄色いテープでくくられ、ぶらさげられている箱である。深夜、家で待つ妻のために買った贈り物とちつとも違わない包だが、ずっと大きい。その人物は自分の重みよりも荷物の重みが何倍も重いから、荷物に総てを集中し、他の何も考えられなくなっている、手に力を込めて持つという状態に奇妙な変化が生れる。手から力が流れ去ってしまう。手に力を込めても、

ゆるめても、まるで蛇口の故障した水道水みたいに、力が流れて荷物に移っていき、荷物は重みを増しその分持つている人物は軽くなる。重みも血液もすっかり移動し終わるとき、荷物だけが残り、その人物はいなくなる。この光線のぐあい、本当はどうなっているのか、誰かには手しか見えないうその人物は、もうすでに、手だけを残して荷物の中に移動し終わっている。

3

——ふにおちないのでね、近頃のお前のすることの総てが、説明がつかないではないか？

誰かは、父に説明しそこねてばかりいる。風呂の水はよく透きとおっていて、チロチロ光が跳ね、誰かはふらふら声をあげる。お風呂なんて、何か月ぶりですもの、ご機嫌だわといい、流したお湯が何処かでふくれあがって排水管の中でボボボと太い音を出し、浅いところに誰かの細長い足が屈折している。カーテンを閉じてでも圧倒的な西日が浴室の中に溢れるから、ふたりの背丈は縮んで見え、まるで数世紀も水であり続け気化したことのない水につかっているように、浴室の中が重たく濼んでくる。

——おでこと頬と顎と鼻の頭が、すりへったみたい、光っているでしょう。

——これ位の暑さで、おろおろするんじゃない。頭をなるべく背の陰になるように引っ込めて、足の爪でも切っていようよ。

緑のワンピースの誰かの頬から、光がギラギラ滑り落ち、白いシャツの誰かの足をよじのぼり、顎の汗の滴りが丸い玉だ。ふたりは一種の熱病に揺られて不完全な顔つきになっているが、臭覚も、触覚も、かえって膨張していて、弱々しくエビ型に湾曲した体に対して、ヒゲヤトゲは、異状に長く大きく広がっている。池の中に誰かたちを放したら、ヒゲヤラトゲやら、お互いに喰いあらしで、どのエビも、ヒゲヤトゲのない片輪になってしまうにちがいない。

——瞼に電流を通されたら、こんなものなんでしょうね、閃光の点滅が眼を閉じても防ぎきれない……脊椎に金属板が結ばれている動物みたいな気持……この暑さが、何かの実験で、この次に、もう実験は終わったと言われたら、涼しくなったわたしたち、何の変化もなく無事なのかしら……のぞいて観察しているひとたちに、どっと笑われてしまうのじゃないかな。

黙っている誰かは身のおきどころのないほどの西日におかされて、眼の前のギラギラするあらゆる方向で、タバコの吸殻の積って行くのを見る。

——マツ毛がないみたいに光が一直線にきて、日が沈んでしまってもこの状態がコダマのように続きそうね。眠くなってしまうなんて我慢できない、眠ることは惰性に落ちることだもの。こうやって食べることに、話すことに、眠ることに、世界の誰もがしているのね。わたしなんか、何処にもいないみたい



に、あなたは誰かと、こんなことを繰返したことがあるのかもしれない。あなたが眠るなら、わたし、あくびをする振りをして嘔みつくわ。

黙っていた誰かが、ちよつとした冗談を思いついたという姿勢で、体のほうぼうを軟体動物みたいに動かすと、動きの裏側で炎の渦がいくつとなく生れる。

——めんどくさくなつて、今まで疑っていたことの全部を信じてみたくなつたよ。きみひとりに重荷を負わせようという気持ちは全くない。自分で自分に冗談を言うわけがないだろう。目撃も何もしていなくともワナにかけることができるよ。半分でなく全部イタズラだと思つてくれても構わない、覆面の仕方、二人にも三人にもなれるさ。こうしていると、何やかや生きにくくなる、個人の問題じゃないんだよ。証拠がないからと言つて、たじろぐことはない、きみがたじろぐのは自分が書くと思ふからだ。名の知られていない方が都合がいい。やり手になれる。まあ大体そんなところなのだ。欺まんするやつは欺まんしてやるさ。いや、欺まんではない、当然していることにきまつている。きみは知識がないから適しているのだ。経験もないから適している。したことが無いから怖い？ 二度も三度もする方がよほど怖い。わかるだろう。不気味で大げさな言葉がいい。言葉を浴びただけで、あらゆる社会の恩恵を得る資格を奪いとるような。今から、僕らがジェスチャーをつけるのは早すぎる。安っぽい道義的自負はくつつけない。きみが劣っている者だから利用しようというのではない、劣っている者は大勢いる。何時も紛れ込んでいて目立たないところが良いのだ。本当は、きみではなく、われわれがすることだ。きみも含んだわれわれだ。心細くはないよ。何の危険も感じない。無造作で

なにげない文字で書いても、きみだとは誰にもわからない。そんな場合やつらは自分の罪状から逃げ出すのがせいっぱいで、誰が書いたか気を回す余裕はないだろう。衝撃を与えるだけが目的というわけではない。とんでもなくハデな人間が密告文を書くというのも、意外性があっていい。

きみは決してハデでないわけではないとみんないっている。見方によっては非常にハデだ。目立たないと言ったのは嘘だ。ハデだから目立たない。材料は不足している、証拠はつかめない。しかし彼等はそうなることを予測しているかもしれない。これに囚われてはいないだろう、ひよっとしたらというところで、いま、現在としては考えないものだ。そうではない、まるで意識していない。罪だと思ふことを、ずっと前に忘れ去ってしまったっている。思い出すことの出来る過去は、全く綺麗に清掃してある。しかし、罪を犯したと思ひ出させる何かは必ず出せば出てくる。違う、怪しい自分を楽しんでるだろう。きみは自分の果たした役割の効果を見守るのだ、面白いではないか。ぼくも面白く拝見させてもらう。きみを巻きこむ？ 巻き込むという自覚はない。少なくとも内面的には巻き込んではいない。操るだけだ。きみは、およそかけ離れたところから、僕らを見ると言う立場にいる。自分のワナに反応を示す彼らと僕らを――。ある意味では、きみがみんなを操ると言うことにもなる。とは言わない。きみは何もしないと同じなのだ。失敗はあり得ない。精神的になんの束縛も与えられていないのだから、自覚のないうちに、きみの顔色が変わるはずがない。無理な冒険を進めているのと違う。人と人の関係は、誰も逃れることのできない網の目になっているから、当然地獄的な妙ないがかりがついていて、することは全部冒険ではなくなっている。不規則に絡み合ったところから、滲み

出るようなやり口にすぎない。きみは自分のしていることに、気づいていなくてもかまわない。

努力がいると言うものと違う、催眠的な時間のうちに終えてしまえる。もったいぶった計画とは違うのだ。書くことは大雑把でも、きっかけになれば効果がある。しかし、僕ときみとは外見的なつながりは何ひとつないことになっている。柔軟に考えてくれてかまわない。きみ自身の一存でやることにしても構わない――

―― 一体何をするので、何か役に立つのでしょうか？

―― 僕の言うとおりに書いて欲しい。つまり代筆してほしい。サインはいらないのだ。今言う、言葉の貧しさ、もどかしさを感じる。物事は始めから書くものかな？ 僕自身が推定したこと、それが真実であること、腹立たしいこと。違う、間違った、堂堂巡りしては通じない。決断した、それが真実に違いないと、一体何で決断をしたか、うまく言えない。決断ではない。事実がここにあるという事。それ以外の何ものでもないこと。こういう事実が確かにある、引っ掻き回されない。具体的に、量と質において。また流動的だから痛みを感じさせる、読んだ者に。ではなく怒りを、彼らに対して。そして受け止めさせる、絶対に見逃すことに不服だということ。本当は総体的にこの事件を捉え返し、突き詰めて行く必要。もっと大きい字だ。性別を感じさせない。元気を出して、相当事実が判明してきて、もうすぐわかる。多分真実だ、偽りなくこれは真実だ。そう書く、きみの書くことはそれだけだ。誰にも洩らすな、やつらは足踏みをする、いや、ぎりぎりの最期まで落ち着いてみせるだろう。もう少しの重み……。

誰かはそこにいて、食べ残しを入れた袋みたいになった体を細くするが、虫に刺されでもしたように自分の存在が、止めどなく痒くなり、痒さのために、あたりがさつきより、せまくなるしくなってくる。書く誰かは次第に向こう向きになってしまい、頭は背の陰で三分の一程しか誰かに見えない。緑色の厚地のドレスの腰に二本の大きな皺が出来、ずっと後ろまで連なって尻の下に入っており、ももから出している左足の上に、膝の大きい右足が曲げて乗せてある。まだ文字を書きつづけ、袖のあたりに三、四本の皺が動き、生地のにぶい艶が、薄暗い中で柔らかく変化しつづける。

みんなが変に身振りの大きい日、かかとの高い靴をはいていた誰かは、時々ひとに突き当り、顔をあげて、とりとめのない話をし、口ごもり、暫らくかかって注意深く次の言葉を探し、そのあいだにせつかちに行ってしまう人にほっとし、ここにいる自分をここからどっちにも移せないことに当惑している。あらぬ疑いを掛けられた女の引き出しが開いたままになっていて、誰かは向かい合った机から向こう側の窓に集まる車の群れを見て、腕を動かし、腕のほかに腕の周りに付属物の出来たようなあの心配をごまかしている。誰かの知覚のモザイクのところどころを残して、それ以外は、その付属物と間断なく交信しつづけていなければならないような。

自然他人には察知できないしぐさをさそい、腕を揉み、押し上げる。現れたその女に微笑んでみて、へんにぬるくからつとしない。その女は引出しをしめ、手帳を持って、こころもちお尻を出しすぎるために後ろがはねあがっているスカートに気もとめず、一番奥にある席の人物の方に歩いて行く。

女は意思で張りつめた体を堅くし、後ろの透明なざわめきや、つぶやきに一方の耳をすます。相手の人物は暫らく待たせ、毎日人と会うときより姿勢を厚くし、首の両側に青筋を膨らませる。

——わたしが書いたと何故わかるのでしょうか？ ——どうしてなのか知りませんね。——それでは、わたしではないと証明して下さいますか？

——困りますね、知らないのだから……。——どんな内容なのですか？ ——別に内容をいう必要はないですね。どうですか。そうですね、別に言わなくてすむのじゃないでしょうか。——随分無責任な言い方ですね。——誰の密告か鑑定しております。素人がしているのですから正式なものではありませんよ。——内容が問題ではないのですか。——僕らの段階ではない、上に回されてしまっているのですから……。

——どなたが、何億円もばっばと、使い込んだというのですか。何処で何兆円もが消滅してしまつたのでしょうか。——知りませんよ、密告書をつきつけられて、説明を求められただけのことです。しかし内容は全く理解できませんでした。

——そんなことはないでしょう、かわりのある方の一人としてはショックだったに違いありません。——あなたに関することに絞ってお答えいたしましょうか。

——おっしゃりにくいなら、それでも、まあ、かまいません。——僕にしても、くわしく知っている人でないと、こういう密告は出来ないと思うから、別の人ではないかと思つて居るのです。彼らの持物の中に、あなたの筆跡のものがあつたので見比べることになったようです。

——それでは、わたしではないと証明して下さいますか？ ——ほかに質問はないのですか？

——何を聞いてもおなじことしかおっしゃらないでしょう。わたしでないと証明して下さい。

——証明という言葉は法律的に言って非常に難しい。

——まだ疑っているのですね、何故疑っているのか、おっしゃって下さい。

——じゃあ、しないでですね。

——よけいな言葉をつけないで、わたしではないと言って下さい。——していません。

——事実ではないと証明するのですね。——します。

——そう、——しかし、その字は男性の字ではないとのことです。

——わたしが、うわさにあげられた理由は、それなのですね、それが全部ですか？ ——それ以上

の理由はありませんね。

——不正の事実があったかどうか、問題の核心であるにもかかわらず、方向転換してしまって、

誰が密告者かどうかだけが問題になるのは如何してなのですか。——だから、あなたではないと……

とも言いましたよ。

——ともの意味をおっしゃって下さい。——内部のものが、このような、汚いことをしたとは思

たくありませんからね。

——思いたくないけれども、思っていらいらっしゃいますね。——そうです。

——わたしだとも、思っていらいらっしゃいますね。——さっき、言ったじゃないですか。

——もう一度おっしゃって下さい。——直線的な反発はよくありませんよ。こちらだって、問い詰  
め方はいくらでもあるのですからね。

——証明して下さい。——さっき、言ったじゃないですか。

——何回でもおっしゃって下さい。——密告は卑劣ですよ。

——本末転倒です。卑劣なのはあなた達です。といつてもわたしは密告はいたしません。ではない  
と言って下さい。——ではない……いいですか、これで。

誰かはこれらの話を遠くで聞いている。光沢のない机の上に茶碗のあとがあり、濡れている布で拭  
いている誰かは、すぐそばの古い食べ物汚れまで拭こうとはしない。

別の誰かが言っている。

——疑われますから、話してはいけませんよ、なにも。しかし、どんなことも言わなければなりま  
せんよ、疑われている時ですからね。

女は身動きもしないで手帳のなかを見る。

——首にするつもりなのでしょうね。……だったのですね、しないですむことが、これほどあるの  
ですね、まだしなければならぬことが、これほどあるのですね。わたしに、まだこれほどしてもら  
わなければならぬことが残っているのですね。

その女の頭上は、いま洗い始めでもしたように白く泡立ち、黒い髪は一本のこらず、泡の中で束に  
なり、束になる前の髪の毛の十倍もふくれあがった白い泡は誰かが平静を取戻す作用をしている。女は肩

がわずかに揺れるだけの堂々たる落ち着きで歩いていく。白い光がほとんど閉じている窓の内側にこぼれ落ち、階段で再生した光を女は考え深げに踏んでいく。

誰かはみんなの言葉、形、色彩、動きを何十分ものあいだ、とぎれなく継続して記憶している。そうしながら、いまとるに足りないことをしているに違いないと思い、あとでその時刻に何をしていたかと聞かれても、いちいち説明できるはずがないと思う。きつと当惑したかたちで、間違い、ごまかし、誰かにとって、この時間がどんなかたちで消え、あるいは居残るか、へんに気がかりになったりしている。

4

高い木があつて、てっぺんの葉が、太陽を受けて、受けたあまりの光を下に落とし、その下の葉も、余りの光を下に落とし、おびただしい数の葉が、受けきれない光を下へ下へと落とし、一番下の葉が、三つの葉っぱの弧の部分で千切れた三角形の光を更に半欠けにする。ガラスの中でぼうつと黄色い円に変形した光が、誰かの足に落ちて来る。



誰かは旧式なミシンを踏んでいるが、踏む足の回数に無関係に針の目が進むこともある。部屋一杯の、いや、その三倍もクラウンの高い麦ワラ帽子をつくるのだ。針は上下にギクギク同じところで動きつづけ、麦ワラ帽子を回していく。ツバの外側は、この部屋の大きさよりも少し大きいかと思われくらいで、回りながら次第に巾を増し、やがてクラウンの部分に、這い登り始める。針の穴のなかに摩擦熱がおこり、すりきれたゴミを焼き、あちら側に押し込めた圧縮空気をこちら側に開いた針の穴から吹き出す。ミシンはほぼ同じ音をたてつづけ、麦ワラ帽子のクラウンを上へ上へと盛り上げていく。高くなるということは、誰かが足踏みしながら帽子を登っていくことになる。既に二、三メートルも伸び上がったクラウンは、天井で細まりはしても、まだ、曲がりくねって、先のとがりは終わりそうもない。

誰かはまるでワラ屋根に種が飛んで来て、芽を出した草のように、その作業を麦ワラ帽子を登りながら進めている。

——作品を作ると言って、僕を追い出すつもりだったのか。大掛かりな仕事をしたものだ。—— 違  
う、あなたは虫みたいにこの帽子のなかに隠れている必要がありそうだから急いでつくったのよ。

——隠れる？ 逃げ隠れしているつもりはない。—— 覆面しているようじゃ、この中の方が楽でしょう。

——面白いから覆面をする。—— 全部遊びなのね。

——真剣だ。面白い。戦争 は面白がっている者たちのいるところから始まるんだ。—— 覆面をし

ていても、地上数十メートルに積っている匂いに気づかないの？

——僕のじゃない、われわれのだ。——だからこの麦ワラ帽子は、われわれのために大きくて、高さが、こんなにも高いのよ。これは単なる脅しのためのほか、役立たない作品とは違うわ。

——覆面もしない、逃げ隠れもしないような、いさぎよい者たちは、大抵死に絶えるものなんだ。

——眠っていて、寝言を言って、自分の正体を他人に示してしまいなから？

誰かもしも麦ワラ帽子を恐ろしく大きく作ることが出来たら、日常生活とかかわりがなくなるとも考えたが、あまり大きいことに驚き、かえってその利用価値が拡大してしまい、彼の全身に被せることを思いつく。遊戯にすぎなかったとわかってもかまわない。

社会が帽子の外で一サイクルの変貌を遂げる間、その中に彼を封じ込めておく。眠っている彼のうつろな避難所としての帽子、中に入ると、実際この形を正確につきとめることは難しい。光の粒子はざわめいて、上から周りから素早く侵入し、静かに帽子の内壁に後戻りして散らばって付着し、ちかちかする。真横から真横へ、真正面から後ろへ、無数の細い外気がまじわるが、彼の呼吸に乱されていて、前方に見える彼の体、腰から下の両足、肩から下の両手が、束ねられ、巻き取られ、新しく生え直す。内部の頂上までは、顔をあげずに見届けられるが、麦ワラの曲がりくねったうねりは、横断面で見える場合、底でほぼ円、少し上で崩れた星形、少し上で三角、少し上で弓形、本当は、なんとも名づけようのない、不確かな立体なのだ。

彼は、自分が部屋の中にいるのかどうか確信を持ってない。薄れた姿を疲れない形に変えてみる。長

いあいだ、何一つ手にもっていないし、手を不自然なかたちで、一箇所に固定していた記憶もないのに、両手に、ずっしりと重い大きいものを持った感覚がはつきりあらわれているのに気づく。否定してみても、両腕を揃えて前に出し、そこに押し付けられた重みは確かさを増すだけだ。しかし朝になれば帽子の内壁に付着する光は白く変り、昼になれば緑に変り、夕方になれば赤に変るかも知れない。その度に新しい体に再生し、彼の移動半径が変るだろう。誰かは帽子のツバの上について、時々話しかける。

——あなたを中心に一・八メートルの半径の円、それがあなたの、あなたと仲間の住まいで、その外側の円九十センチ幅が、わたしのいるツバの部分なの、時々ツバを踏んで、一回転歩くと、麦ワラ帽は足の裏に痛い、わたしが動くときあなたの住まいは地震でしょう。そこから一キロ外側の円のなかに誰がいて、なにをしているかというとき……三キロ外側の円の中に誰がいて、何をしているかというとき……四キロ外側の円のなかに誰がいて、何をしているかというとき……。

誰かは海と陸の入り組んでいる地図のまんやかに住んでいる。誰かはコンパスを四十度に開き、広げた地図のまんやかなのこの地点に突き刺して円を描く。この円周上の各地点はここから直線距離で二キロ離れている。更にコンパスを広げ、もう一つの円を描く。四キロ離れた地点が、その円周上にある。同心円上の記号をひろう。交わっている線や点線のほかに、地図を折りたたんだあとが、あたかも、地図と一緒にその上の事物も折りたたみ、かたづけられるものかのように、そのたたみ癖のまま、伸びずに屈折している。いま破り捨てたとしても、同心円以外の記号は、何の影響も受けずに、常に

どこかに痕跡をのこして存在しているはずだ。円周上の記号の上に滑り、やがて逆まわりに戻り、そこに見つけた建物に目印をつける。

常にどこかに、何かがあるから、目印の数の非対称を是正するために地図ののっている記号以外の高い樹木などを思い浮かべる。人間が流れる街路は、地を這っている管であり、上を見上げるのには草臥れすぎるから、彼らは高さは無縁になっている。そうでもない。誰かは深い地面からずっと上のところで、町並みをざわめく海として見ながら、車でよく走る。そのとき、空に信頼を寄せて伸び上がっているものを見る、遅く意気込みながら、意気込みに挫かれている森を見る。地面のその記号のなかに一、二本の喬木があるはずだが円の向こうだ、地面の起伏が、誰かの目のなかで修正された眺望にかわり、地図の一部が身を起して立ち上がると、記号が傾き、地図の折り目が深まり、自然のうちに空間を折りたたみ、地面も事物もすべて折りたたんでしまう。ガラスの多数のカット面のように、面が異なった角度を持った地図を、誰かは筋の通り、四つ折り、八折り、十六折りにきちんとたたみ直す。

——あなたの周りの円、わたしの領分の円、そのまわりの大きい円、もっと大きい円、あなたの仲間が駆け回っているわ。やつらを追って、やつらから逃げて、やつらの、足音が駆け回っている。円は糸巻きから糸が繰り出されたみたいに消えて、いまに足音だけが押し合いへし合いするのね。しかし、こちらに近づいて来るってことはあり得ない、あなたは隠れおおせたのですもの。大きな帽子をかぶり、美しい女性をツバの上に飾っている見えない人物。大きすぎる帽子は芸術品なんだから、ふれる

ことも、覗き込むことも拒否できる、治外法権とはこれを言うのね。帽子が天井で折れ曲がって下にさがり、また上に伸びて下にさがり、クラウンの高さを納めている。こうしてみると天井って意外に身近にある一隅に過ぎないのね。あなたからずっと遠い？ 遠いかどうか測れない縁もゆかりもない天井なのでしょうね。天井より高い屋上にいるだけで、体の真中にびくびくおびえ、固唾をのむ小さい動物のいることを知る。もともと宇宙の大きさとの間にはいかなる釣り合いもありはしないのだ。下を見る気はないというふりをすれば、逃れそうなものなのに、かえって視線を沈みこませてしまう。さらに塔屋への錆び付いたハシゴを登るとき、裸足の裏を折り曲げて、横棒を鳥の肢のように掴まなければ危ない。誰かは折れ曲がっており、すでに重心は腰より前に出かかって、高さを水平に見ている。誰かの前にある物体は、全部が一緒に弓なりになり、なにか遠く、測りきれない高さに積重なって見え、ともすると引力圏外に飛び出して見ている気分だ。引力は何時までも無秩序な方向から働きかけてくるけれども、全身でまとまって耐え、たしかな位置として征服してしまう。地面のまんなかの、この塔の地点にコンパスをつきさし描かれた円は、東の教会を通るはずだが、それより近くにある建物の広告塔のかけにあるのだ。やや東南に於いて小公園の上を通過するはずだが、前に高かった樹々は、切られたまま伸びず、目印にする何もない。後ろを向けば海の中に両側から突き出す岬があるが、船の煙だ。わずか手前の浮き島が、円に接するのも知れない。外側の円周上の地点は、南東において、既に気層の中の細塵か水蒸気と日差し具合で見えない。恐らく視程は、上昇気流のある日とない日で違うのだ、煙が中途半端に佇んだまま動いてはいない。

誰かはまだ高さを水平に見、太陽の真中にぼっかり黒い穴があくのを背で感じる。ただ一度だけすれ違う道路の群衆は、入れ替わり立ち替わり下に落ち、上に登っていくと、地上の車という車、建物という建物が、一階や二階の側面に次々追突し、跳ね上がっていく。誰かが空の乱雑さに恐怖すると、屋上から飛び降りることを期待する群衆の渦が盛り上がる。誰かは自分を軸にして回転し、なすがままに落ち、落ちた方向がかすみ、物の音が響き渡るのを加減できる。目だたないうちに、誰かの足が伸び上がり、大きな一歩が群衆の渦をまたいでしまう。一挙に渦から外へ出たところで、気がつけば、そこは地の底の地獄で狭まぐるしく、逃げ出すことの出来ない囲みである。昆虫のまつわりつく、飽くことのない遊戯のように、疲れを知らずに蠢くのは、誰かの声だ。

——大丈夫、涼しい顔でそうしているのよ。そうしているうちに、誰かが、厄介な事は全部自分の方にたぐり寄せて、あなたを飛び越えて行ってしまいわ。あなたの体は次第にとんでもなく大きいものに感じられてくるでしょう、帽子のなかはあなたで充ちて、わたしのことも、世の中の総べての人間も、何もかも、あなたにまぶされた埃くらいにしか、感じとれなくなってしまうわ。行きついたところが麦ワラの下で眠る路上生活者なのでしょね。無限に続けていかなければならない行動なんて、どうせ始めから終わっているみたいに、何もないと同じ、効果がないということね。あなたの責任は、あなたの体の大きさまで、やたらとそれ以上の付加部分を、気にしたがるのはおかしいわ。あなたは、あなたを支えにしてけりをつけるしかない、一・八メートル半径の円の外とは関係なくやって下さる。

誰かは帽子のツバの上に乗って、麦ワラの荒い縫い目のあとを、体の下に押し付け、符号を合わせるように縫い目のあとの一つと、言葉の一つを、つき合わせている。ときには、そのなかから音が全部消えると、誰もいなくなつたかと疑い、麦ワラ帽子全体から異様に散らばつた音が洩れると、中一杯に誰かたちが押し込められてしまつたのではないかと疑う。

マツチがすられる、シューとさみしそうな音が、コの字型に囲んでいる建物の何箇所かで威勢良く撥ね返り、音を拡大する。闇の中で桃色の火がふわりと浮き、三十センチほど下り、消える。何回も同じことが繰返され、火はマツチ一本とは信じられないくらい鮮やかな桃色で、闇のなかで中心を主張しては掻き消える。消えたのではなく、燃え移るために、こがし、炎になるまでの変化を進めているのだ。この闇の中心点の、その脇に、巨大な物体が置かれている。ポツポツと火のはぜる音が跳ね返るまえ、白い煙にまかれた麦ワラ帽子がさらに大きくふくれあがる。飛び出し、寄り集まつた煙を集めて、家よりも倍も高い炎がいきなり真上から飛び出し、上から下へ燃え尽きて行く。

誘い出された虫のように、黒い人影がゆらゆら細い。  
られる水のように、黒い人影がゆらゆら細い。

誰かのいる部屋の中に、鼻唄のように気楽な音が入り込んできている。誰かの幾つかの感覚のどれもこれも平気で満ち欠けており、何ひとつ力を入れないで腕が曲がり、足が伸び、首がちぢみ、顎が胸に密着し、顎が炎と連なり、ママの子守唄を聴いているように筋肉がちぢんでにつきりし、麦わら帽子は褐色になって、足が目にとどき、お望み次第に部屋のなかのあらゆる四角形を大きくしてい

く。そして誰かは、絶対誰にも見破られるおそれのない、黒い塊になってしまふ。

5

ここは濡れているから集まった者は下を見て移動する。下は暗いけれども、猛スピードの車から近景を見るような空転するフィルム。誰かは逃げているが反射神経はいらす、身がまえる必要もない。何時か、一度逢った他人全部と一度も話し合ったことがなく、いまでも議論などするはずもないから、仲のいい友達になってなごやかだ。不安は貪欲だから、そのうち際限なくおそってくる。

ほら、来た！ 太陽のニセモノがあらわれ、手で払い落せるほどに近づくと、みんな誰かと一緒にそこにいるのに、限りもなく遠くに追いやられ、誰もいないと同じになる。落ちていたホコリだらけのメガネのレンズを指で掃いた二、三本の筋から、どこまでも見通せる。見通す向こうには、見ている誰か自身の核となってしまう物体が必ずありそうな気がする。何もなかったところに発芽するなにか？ いま、加害者の男が静かに去り、カナヅチで脳天を打ちくだかれた男が道のまんなかに伸び、白いシャツの両肩が血でぎらぎらしても、見ている群衆の顔に現れるさまざまな信号は失しなわれて



いる。目撃したことは無口で、彼らの間のできごとではなく、ひとりひとりの幻覚に近いもの、幻覚よりももっと空々しいもの、あるいは全くなかったこととして閉じられてしまう。

誰かは、前からくる人々を、ちらとも見ないで、意識をとぎししながら、大勢のひとりになっていく。突然途方もなく拡大された顔に衝突している。その顔の短い笑い、アゴを打たれた誰かの口のなかで、変な味が広がり、誰かがブツブツ文句を言い始める前、不意に逆手をとられ転倒している。人は大勢現れるが、背を向けて過ぎていく者ばかりで、このなりゆきを見ている者は一人もいない。降って来るパンチは、肌を打ち破るいくつものうなり、打たれて針金になったマツゲが逆立ちをして目にささり、赤い涙が沁みだし、左右からゆさぶられ、両手が体の中央で交叉し、腰が数十センチものび、伸びすぎて体が二つにたたまれ、力に閉じ込められた箱のなかだ。相手の熱い服のなかに耳が隠れて、聞こえなくなり、声が飛び込み、呼吸が爆発して手の結び目が弾き飛び、四肢が突き出し何も掴まずバラバラになり、泥の海のように重い動きのうちに、体がひとつにまとまって四つん這いだ。腕を突き出すと、つぎつぎ機能が連続して動き、さっきと同じ体型になって同じ動作を繰り返し、誰かは筋肉に刻み込まれている屈曲後退する動作の筋書を押し退け、やっと身を起して立ち直る。誰かは黒い影をいくつとなく後ろに投げる。臓器が真珠色に変わるが、蹴られても壊れもしないで、二メートル飛ばされると、三メートル投げ、組み合って自分のアゴの位置をもう少し持上げることには、気を取られているうちに、横倒しになる。足を上げて一回転すると、相手が崩れ落ち、すでに片づいたみたい四方から身を守ることをはじめ、自分の体一つで球になって従順になる。誰かも素手でできる暴力

はそこままで、同時に同じかたちで静止する。何をしても誰かの体は忘れずに誰かのところに戻ってくる、誰かが飼っている体なのだ。誰かは飛び起き、脱ぎ捨てられている服を拾い集めるのに、手まどっている。ヒジの後ろに、熱があり、紫色にふくれたキズが痛む。誰かはそれを目にするのを拒み、服を被り、ノッペラポーのまま、蹲くまっている。ずっと時間が経ってから口をひん曲げ、反対側に頭を突き出して服を着ており、そばに居るのは、知らない誰かだ。それは女で、誰かを正面から、じつと見ている。もう一人ほかに女がいる。一人が首を傾けて、もう一人の肩で、隣の女と同じに笑って見せる。不明瞭に霞んでいるのではなく、ふたりとも、すっかりひとりの人間として確認でき、同じ大きさ、同じ姿で、同一人としか言いようがない。ひとを驚かす意図でそうしているのか？ 誰かは、厚ぼったい瞼のなかに瞳をよこたえ、保護し終わってからそっと見直す、さつき感じたよりもずっと奥にいる同じ女が、さつきと反対の方向に首を傾げ、隣の女がひとりの肩におなじ傾斜で首を傾げて笑いつづける。二人の女は、同時に、このためにあまり体力を費やしたくないといわんばかりの、いいかげんさで誰かのキズをしらべている。

——奇形になったようね。ふたりは一つの声で言う。

——奇形とはなにごとだ？ だが、まえまえから、ぼくはワラの束だという気がしていたんだ。ワラが二、三本抜け落ちたのかもしれない。

誰かは一面の散乱光のなかにいて、のめりこまないようにゆっくりと立ち上がる。意識は細かくひび割れ、つなぎ合わされた、さまざまな彩りにいる。

——近づくまいでくれ、さわらないでくれ。まわりはへんにうようよするから、誰かは、自分の位置づけが不能になって、誰にも寄りかかれぬ自由のための絶望に陥ってしまう。

誰かは、絶えず浮上し、視界の左端と右端に緊張をおき、予想もしなかったひずみの世界を、かえって活気づける。飛ぶように消えたり、霧の向こうからのように、にじんで現れたりして、もはや、向こう側と一緒になったり、これ以上向こうに近づくことが出来なくなり、目ざすものに到達しない。

ここに階段があつたかどうか？ とにかく階段があつて登っていく。一段一段が、確実に一步のための平面の断片であるから、足許を見ないで登ることができる。これはただっ広い道路や、部屋のなかの独立しない一步と違い、歩き方を間違えれば前のめりに倒れたり、後ろにもんどりうって落ちる可能性のある一步だ。階段を上がる一つのリズムがあつて、そのリズムが一つ狂うとき……。狂う。誰かは次の一段に片足を乗せた途端、危険に対する条件反射で、足を引っ込めて、両足を前の一段にそろえて立ちすくんでしまう。次の段は柔らかく、少し高さが違う、平らではない、よく見れば両端が欠けている。中央部分だけに縁側の上がり石のような丸いものがおいてある。誰かは改めてその段を踏み直すことをためらって、全身宙釣りのまま、階段の途中で動けないでいる。一体何をしているのか？ こうしていなければならぬ理由がわからない。危険を予知して前に進むことを拒否する馬のような超能力は経験上ない、次の段に右足を上げ、重心をかけ、少し足を屈伸してぐらぐらする。足の下妙なはずみを靴裏でうけとめると同時に、引っ込め、また下の段にすばやく両足を揃える。

人間が、うつ伏せになって、欠けている一段を補っているのだ。

——誰だ？ ——如何した？ ——さっき衝突して組み合った誰かだ。血まみれの頭を抱えて、既に死んでおり、背に幾つもの靴跡がくつきりときさまれているのは、人であることよりも、もはや階段の一段になりきり、この物の配置になりきったことを示している。誰かは吐き出す息ごとに、自分自身を吐き出す恐怖で、階段にかがみこみ、足許で知らずに指を動かし、おびただしい数の自分の名前を書き散らしてしまう。指先には何時の間にか血が付着し、名前は血なのだ。余裕を失い、それを消すために、慌てふためいている。これでは何処に逃げ隠れしても無意識の行動に口止めはできない。誰かの総ては洗いがきかない。

誰かもこの欠けた階段の一部分になるために、うつぶせになって、一面、物体だけで覆われている世界のなかに埋もれてしまう。これで、うるたえる一刻一刻から開放される。破壊された大地のカケラの上にとつ伏していた満足と、世界は何ひとつ変わらないで、壊れた誰かだけがいる不満と同居している。誰かはあまり近くにそこを見ていて、どこに目をすえてよいかわからなくなり、両手の拳で目を固定し押しつづける。それでもなお、目をどこに据えたらいいかわからず、迷いながら階段の一段になり続ける。時に足音が聞こえてくると、胸の骨がたわみ、脇の下にビロードのような厚ぼったい花びらが咲くが、不思議に踏まずに通り返してしまい、誰かは階段になりきるために、背中を微妙に調節して平らにする。

誰かは地震計である。横になっている一本の糸が、いきなり上下に激しい刻みを描き、心電図とも

一致する、集団が近づいてくる騒音にちがいない。一息いれて、気を取り直す間だけ、折り曲げた体を伸ばすと、大気が一せいに流れ込み、誰かを叩きつける振動になる。階段を降りる人々は流れであり、水溜りのたつた一滴にすぎない誰かは、忽ち顔じゅうに波をつくって、彼らのなかに、あつと言う間に紛れ込んでしまう。

6

誰かは両手のひらをそろえ、土に押し付け、大きな文字を書いている。仲間が名前の呼びかたを間違えたから、聞こえてもそれを続ける。

——このあたりがお前の場所だと言うのか。奴らに土地をとられるなよ。お前がお前らしくあるためには、土地が一区画いるものなんだ。土地と縁が遠くなり過ぎると、お前の居場所がなくなってしまう。びしょ濡れになっても、土が流れ去ってしまわないように手で押さえておくんだよ！

みんな笑う。

——無力に飽いてくるとそう言うんだ。——場所が必要だって？ 永遠にここに住むと思わせ、安

らかにさせようって言う麻薬だ。誰かはそれが習慣になった仕草のように文字を書きつづけ、そのうち自分を取り囲んで四角や円を描いて見たりする。

みんな地面に座り込んでいるが、冷えてくる。今霜が降りたとしても皆殺しにする力はないだろうが、誰かたちは用心して、隣同士でまさつしあい暖め合う。だが奇妙なことに、自分の動きで体を揺するだけで、他人に対しては無感覚で堅い上着を着ていて、もみ合っても、それほど暖かくはならない。誰かだけでなく、彼らは、両手をひろげて、四角形の領分を確保するため、爪で線を深く描いていく。机、椅子、車。看板、物をおびやかすバリケードの場とは違う。

——ふざけすぎる、彼らは品の悪い空想と一緒にでないと、寒さをしのぐ方法がないらしいわ。

彼女たちは彼らを笑いながら、保護される立場にあるのだと判断して、彼らから上着を奪いとり寒さを防ぐ。——わたしたち兎に角一緒にいるから、どこかの小ボスと同じくらい掠奪する力があるななどと考えてしまうのね。

測っても測りきれないほど広い森なのかもしれない。奥にどんな闇も隠されていて、森はあらゆる種類の光景を隠している。四角のなかに三角が幾つ描けるか、その宇宙の中心が何角形であるか。みんな沈黙したとしても、彼女たちは別に後退りはしない。寒さは実際に脇腹のあたりで、やばんで狂ったような響き方をしているのだ。

いつも窒息したようになっていた男たちは、まるで場面が変わってしまったといわんばかりに、急にどんな言い方も出来てしまって、地球など、自分よりずっと小さくしてしまう。誰かは誰かに首を

傾げ、少しずつ口から麻痺に襲われてきて、皮膚の下へ目を閉じたまま滑っていき、ある瞬間、明るさと暗さが一緒に来て、小さな爆発をつぎつぎ起し、更に身をよせる。暗さのなかに黒が走り抜け、潜在する力に向かう。よんだ汗の臭いを、夢のように背中から発散させて、平手打ちにあったと同じピリピリした痛みを広げる。森のなかに、いま、小さい種子がつぎつぎこぼれ落ちて、何の面倒もなく芽ばえてくる。木々の奥の根もとで、自らを守る小さい核にちよっぴり手をかけて、放さずに、臆病そうに、しかも光の筋に添って伸びてふるえている。生れたばかりの天体のように時間が無限にありすぎる。タンタンタン、漕いでしなく秒があつて、なにかをびしっぴしっぴとこわしながら、目の前をよぎっていく時間を。誰かは何回も連続して見たりする。何時までも連続しすぎるから、自分が、秒針の動きにつれて死に近づく時限爆弾であることも忘れている。誰かが、得体の知れない集団の沸騰のとりこになれば、寒気に影がゆっくり回転する。見、感じ、開放された時間をどう使つてよいかわからなくなつて、誰かは、こやみなく動き続けるこの時間に釘づけされている。

誰かは、さようならと大声でいって、昼の倍も、平らに広く明るくさえた夜なかの道を、駆け出すことができそうだ。もし彼がいたら……、一定の距離をおけばよい、近づきすぎてから気づいたときは……。誰かの方から微笑む、ただ何も言いにくいから、何も言わないで、除々に地面に触れてくる森の奥の倒木のように、彼を斜めに見ていて……。やはり押し潰されないうちに逃げなければ……。誰かの体のところどころの不安定な個所に支柱が、松葉杖になつてブレーキになる、アゴの下にできた支柱が、長い長いアゴ杖になつて思案させる。

——わたしの声帯は何色？

——今に見えるさ。きみは自分のことを言おうとするからいきづまるんだ、複数のことを言えば楽なんだよ。——ああ、泣いてしまいたい。わたしが泣けば、あなたも泣くし、大抵の人も泣き出すのなら、泣いても構わないのだけれど……、みんなは、一体誰の貰い泣きならするんだろう。何時？ 死んだあとで泣くものかしら？ 殺したあとで泣くものかしら？

何ごとかが起り、落ち葉の混じった枯草や枯れ木が二、三本炎をあけて燃えている。誰かは上着で火を叩きつけているが、火はかえって、煽られたように炎を大きくしていく。……焼け焦げる。葉っぱが、バリッ、バリッ、と一枚ずつ落ちてくる。不思議だ。どうして、こんな音をたてるのだろう、バリッ、ポトポト、バリ、ポトポト、バリ、ポトポト、バリ、ポトポトと聞こえる。別の誰かが飛んできて、誰かが消火作業をしていた場所を交替して受け持ったたちで位置し、誰かを火の手のあがつている一隅に場所を移すことをよぎなくさせる。誰かは救援を喜んだのも束の間、すぐに自分を軽視する敵意に出会ったと言う顔になる。けんかをするとしても、火の手が静止した瞬間をみつけ、揺らめいたらすぐ終わらなければならぬ。狂人の動きを見つめるように別のところから見ている彼らが、見かねたか、近くにある大きな草を根こそぎにして、はびこった根にどっさりついた土ごと火の上に投げつける。彼らの一人が誰かと誰かの間をかきわけて、二人の無能ぶりを非難しながら、足を蹴飛ばす。もう一人は木の枝を折って、それで火を叩く。オーオー、火の手を消す作業にふさわしくない受け入れかたで、救援を受け入れ、十人以上群がって、しかしたくみに火の海に配置され、次第に攻め



立てて、外側からなかへ集まると、火は逃れることの出来ないワナに陥ちたように、揺らめきながら透明な炎さえ失っている。地面の土と灰の入り混じった堆積のまわりに、白い煙が、誰かの背の中ほどまで這いのぼり、ビラビラによじれては、また這い降りる。みんなは体中を熱くし、全身煙になり、涙一本の黒い線になって、この騒ぎを終わりに引きずり込んでしまう。

みんなが、斜線になった暗さのカーテンで、ひとりひとりのいる場所を区切る。とたん、ふたたび目の前に火の海が現れて、燃える表面を地図を巻き込むようにめぐりとり、やはりそこには焼け焦げた闇が平面に穴になって陥ち込んでいる。

誰もそれを言い出さないうちに、運ばれていった声は、森の下草が茂ったなかの、付近の地形が変わったために、水のなくなつた小川にとどいている。川底にも他の場所と同じ枯れ草が丈高く茂っていて、その影に、集めてきた食糧が隠されている。なかに、たくさんのビンがあつて、彼らがそれを草からリレーでとり出し、飲み終わるのに何分もかからない。コーラの黒い水の数箇所、あるいは中心にだけ、一直線にのぼり続ける白い部分があるはずなのに、ここではなにひとつ見えず、飲み終わってしまえば、盗んできた飲料であつたとしても、全部空瓶にすぎなくなる。

—— 一緒に憤慨したり、さ迷い歩くのは頭がおかしくならなければ、できそうにない……一人が、言ったとしても、もう飲んだ以上、拒否しなかつた以上、同じ仲間ではないと主張することはできない。誰の表情も黒一色の背景のなかで、黒ずんでいるが、塊みたいになつていた体がやわらかく湿つて、この連続する展開のなかで、何時のまにか、みんなに合わせて自分を動かしていくのに、ためら

いはなくなっている。飲んでしまったビンの中が、やや黒くなり、暗闇でも変にきらめいたりする武器に変化している。風はコボコボ、空ビンのなかで鳴り、さっきの干上がった小川の草のなかに戻せば、その底で、まるで埋められた地雷のような危険な存在になる。

——あたしたちのそばにいるのは我慢できないと思っていらつしやるのでしょうか、まだ？

——べつに。——（べつに関係ないんですって、あたしたちと）——行きたくないの？

——行って見るつもり。——（行ってあげるんですって！）

——いざとなったら、どっちだっていい、すばやく身を交わして駆け出すのよ。

——草臥れそうね。——（草臥れるのはごめんなんですって！）

——おっかなびっくり、嫌だ嫌だと思つて、それでも足をさらわれるつてスタイルね、あなたは。

——でもないわ。——（でもない、でもないつてことは、様子を見て、方針をきめようつてことなのよ！）

——あたしがこのひとたちの間にまじつていては損をしようと思ひますか？

——あなた学生？——（生活をかけない行動だったら不純ですって！）

——一般人にまじつて、学生であることから飛び出してしまえ、つて言うひとがいるでしょう。

——その方が迫力があるとでも言うのかしら？——（ね、聞いた？　つまり生活をかけるのが迫力で、生意気な学生は困るんですって！）

誰かのかたわらで話している女は、いちいち翻訳して隣りにいる誰かに告げ口している。妙な具合に告げられる言葉を、誰かは、全く関心を示さない様子で、暗いなか、ルルルル、とか、チツチツ

チツとか、ときどき意味のない声を発して体を揺する。

木影がときにあらわれる薄明かりのなかをのぞくと、意外にもひとりひとりが、勝手な方向を見ていて向きあっているものは少ない。ただ、小川の底から甘い匂いが流れ出ているのか、ときどきかすかに息を止めると、焼け跡の匂いと一緒にかぐことができる。

——暖かくなれば昼のように全部見えて来るかもしれないわ……。

誰かが突然腰をひねり、誰かが楽器をもち、急転回した場面のなかで、みんなは踊りまくる。唄いぶつかり、踊りぶつかり、しかし、妨げあったりはしないで。

一つの広がり、みんなで真似をすれば、それぞれが同じ生活の根源をもっているのかと間違ってしまうそう、暗いために細部を見失っているから、単純にそう見える。誰かも同じになっていて、鼓膜はせわしなく打撃音を感じ、体のなかのどこかで波が寄せたり返したり、叩きつけたりする。つぶやきで、ぶつぶつ目の前を刺しながら草を凶暴に踏みじり、よそ見をし、しっかりと足を踏んまえて、ひとの背後で踊りをやめる。すべてが、生きていて、甘い匂いを発散している。

みんなは、さかんに往き来し、疲れを知らずに踊り、誰かがなんとなく変化する。

……わたしが、もし、歌ったとしたら？ みんなも歌う？ もしも自分に、これらの者を動かすチャンスがあるとしたら、多分、きつと、こんな途方にくれた状態にいる時……。

誰かはさつきまで確かにこの集まりのはずれにいるに違いないと思ひ、それでも彼らと同調してき

たけれど、いま、ほぼ同じ位置にいて、自らを中央に置き直し、誰もがよく口ずさむ人気ナンバー「逃げてしまった宇宙船」を歌いだす。

「地球に帰るのは嫌だと、彼は言った。ふるさとの地球には、優しいひとはいないから……」それは腹鳴りめいたギターにダブって、不協和音になり、金属性にきしり、ちようど、体の内部から伝わって耳にとどくのが、ただひとつの聞こえかただとも言うように、外側から耳に入ってくる誰か自身の声は全くない。誰かが歌い出したら、耳の敏感なひとりを引き寄せ、すぐみんなの合唱に移るはずだったのに……。

誰かは、ころみかんの効果もたらさないことに安心しはじめ、自分に住み着いた、地声でその歌を口ずさみはじめる。長く引き伸ばされる音調が、気づかないうちに、意外にとぎれないで、伸びきって音のない真空状態に投げ出される。誰かの声は小気味よく風に乗って響き渡る。

誰もが踊りを止め、みんな途方もなく背を高くして静まり返る。大仏に似た巨人像が数十体も見下ろしているから、誰かの声が破裂する寸前の振幅を示す。群になった自分の声が、貪欲に空気をバリバリと齧りつづけ、恐ろしい食欲を示し、誰かのアゴや耳たぶまで襲ってくる。いつも縁遠いところにいた自分の声が、声に背いて叫ぶものを撃ち殺す権利でもあるかのように、歌いつづける。

そのずっと向こうを、誰かたちの足音が駆けめぐり、いきなり、誰かが、——逃げるよ！ やつらがくる！ 誰かが横槍をいれても、誰かは歌い続ける。誰かを囲んでいた者たちの背が低くなり、何時のまにか、みんなが声を合わせて歌っている、合唱しているのだ。みんなは歌いつづける。それぞ

れの声を聴き取りながら、綺麗にハモって。「地球に帰るのは嫌だと、彼は言った。ふるさとの地球には、優しいひとはいないから………」

カギ形になった空が移動して行き、ギザギザのカギ形が、幾つも幾つも重なってくる。空は明るくほぐれそうもない。

——朝がこんな来かたをしたところで、やつらが過去の残留物として存在している以上、今朝も過去の断片なのだ、朝が来るということは、兎に角、倫理を小馬鹿にしたことなのだから！ ——それにしては、爽やか過ぎること……。

みんな紛れ込んでいる。——誰かが、ウンをいって、食べられないものを食べると言ったら？ 大勢だから、どんな悪事もできるなあ。

——あなたじゃないの？——わたしは一口だけ飲み、あとは全部彼が奪って飲み干したのよ。あれ、毒だったの？ 腹痛がしたと言っていたわ。——彼はあなたに飲ませるのが怖くて奪ったのね。

——違う、あなたの作業ならやられても構わないと思って飲んだでしょ。——苦いと言ってた？——そう。——精神安定剤よ。——腹痛がしたと言うのに？ 彼は毒が沁み込んでくるのが怖くて、

噛み砕くのをはぶいたようよ。——粉末だと言うのに？ そんなに滑稽なほど受身な気持ちになれるわけがない。——快いの？ 歌ったから？ ——何時かの仕返しとして、公平にのしりあう資格ができたようね。誰かと誰かが極端な小声から大声になり、危険な顔つきをし、話すために動かす唇と同じくらい早く脛を動かしている。

何人が目覚め、同じ姿勢で坐っている。まだゆるんだままの相互関係のなかで、目がどんより空家のようにがらんとして何も写さない。それでも徐々に、立ち上がり始めるが、立ち上がりかたに、膝を伸ばすと既に立っているものと、パンツのヒザをワシずかみにして足をさらに屈してから立ち上るもののがあつて、それによつて脅かす者と、脅かされるもののがきまるらしい。誰かと誰かは言い合いを始めようとして中止するが、口は半開きで歯が魂のかけらみたいのにぞいている。

誰かは自分を軽くも重くも感じないところにおいて、自分自身に忘れられてしまい、すべてスクリーンに向こうで見ている。衰えたりすさんだりした心があつたら、慰めてあげてもいい。その魔力を得たかのように誰かは体積を大きくする。朝だと言うのにここでは光が拡散している、陰影の端は決して際立たないで、多少縁より入る。誰かたちの影はほんの一部で、蚊トンボのように細々とした姿を飛び離れたところにおいて尾行してくる。みんなが移動すれば地滑りのようにきて、死体のように止まる。しかし、夜から昼へ、ポケットを裏返したように投げ出されたみんなは、乱雑に群がり、ただ共通のぬくみを持っている。だからいたるところ、誰かの背景は彼らであり、彼らの背景は誰かなのだ。

———どうするか、わかった？ 目が見えなくなったら眠ろう、足が悪くなったら、ゆらりゆらり歩こうなどと言う呑気な事態と違う。不正、不合理、非人道。たあいのない話と違う。———なんのこと？ どこかで叫び声がマイクを叩いているのかも知れず、誰かはそれを、みんながばらばらに離れてしまわないための、日常の噂話的役目で響き渡ると聞き、あるいは難破した救命ボートからの助けを呼ぶ

不安のわめきと聞いている。

「タ、タタタアア、実践する過程を媒介に……より普遍的立場を追求……タタア、タタタア……タタア」その言葉は消し合うひとつのリズムにまとまる。じれったさを剥ぎ取る作業で爪を噛んでいる誰か。そっくり似た仕草をしている誰かが果てしなくいる。

——ピクリン酸、硝酸アンモニウム、硫黄、濃硫酸、塩素カリ……。

——あるの？ ないの？ 言っているのも誰かであり、聞いているのも誰かであり、誰ひとり自身である必要がなくて、——名において、名においてか……。笑い飛ばし、秩序だった無秩序の中で、何万ものつぶやき。誰かが頭を横に傾ければ、伸びた首のつけ根からもう一つの首が生え頭ができ、誰かは増殖する。

枯草が露を含み、短刀の刃のように葉先を並べて上に向けても、彼らが吹きだし飛び散っている泡みたいなもので、がくとと葉先を垂れてしまう。本当はすでに半数はガタガタのトラックで移動し、あとは沈殿物のように残っている誰かなのかも知れない。

胸の中心から背に貫く風穴があって通りすぎる風は、遠くから聞こえている幼い日の遠雷そっくりの不安な響きだ。

突然の戦争。飛行機が雲を下に散らし、ぶるぶる震える暗号であらゆる地点を占領しながらきて、急に空気をまだらにする。地上がゆっくり擦り減り、誰かの鼻を伝って落ちる痛み。ガスに対して素手なのに、ひどく重い武器をもち、その重みに耐えているかのような長い長いスクラムを組んで。ひ

とより後ろに、逃げ込もうとする敗退から自分を救おうとする。相手に届かない奇妙な試み。あとはもう、ギザギザのカギ型になっていた幾千もの空が陥ちてくる。

いつか誰かの毒ガスによる紊乱が消えても、後遺症が幾十年に及んで、毎日ドンブリ二杯の痰を吐きつづけ、痰の乾いた塊はおそらく石よりも固くなり、ついにきちんとしたピラミッドに積み上げられる。虫に食われた大きな花の上にヒザをつけて、全身が金属でできている奇妙な動物に、四方八方を囲まれた誰かは、これをせめて幻想を持つとうとする欲望のせいにして動こうともしない。

7

シヨワ、シヨワ、シヨワ、波の崩れたあととは、洗濯物をゆすいだときのようなアワが散っている。一度目の波は、誰かの足裏の砂を一樣にさらっていき、立ったまま、僅かに沈んでしまうけれども、次々くる波は、反対に足の下だけを残して砂をさらってしまい、いつのまにか、両足が小石ほどの砂の山の上に立っている。更に砂の山が回りをさらわれると、とんがった棒の先に両足をおいたように、危なっかしげになってくる。誰かは、その砂が足の下で崩れたらすぐ……すぐにふり向かなければな



らない。……崩れて、ふり向く。

誰かと彼らは、濡れていない砂の上と、波の寄せる砂の上に離れているが、間隔はわずか二、三メートルでしかない。誰かは思わず笑顔をつくりあげる。頬を上には持上げ、口角を両脇で引つ張りあげ、眉まで一センチ上にあげるけれども、どの程度笑っているのか分らなくなつて、顔の両側からじりじり笑いをずり落としてしまい、唇の端が下がつてへの字になる。それでも強い陽光をはじいて、顔のところどころに笑いの凹みを作っていることを想像でたしかめ無理をしている。

——ちつとも気がつかなかったわ、いま、ふりかえてびつくり、三カ月ぶりね、お元気？

誰かの笑いは砂に吸い込まれた水のように消えそうになる。

——ここはこの湾の中央なの、もう二キロあちらに行つても中央なんです、もう二キロこちらに行つてもやっぱり中央、どこだつてそう見えるのは不思議ね。いつだつて周囲をおどかせば中央になつてしまえるのですね。わたしたち、海なんか四隅にかたづけてしまつて、ここにいるよね。

誰かはへんにどぎまぎし、とりとめがなくなる。

——あのときあの部屋、椅子がいつもさかさに片づけてあつて、広々して、椅子の脚が光つた床に映つて、海藻みたいにひよろひよろ伸びて見えたのをおぼえています。

誰かはいいながら小さい貝がびつしり生えた棒を踏みつけ、薄紅色のおおきい貝殻をみつけて拾い裏返すが、変に生々しい生毛がはえて、生臭い肉のように厚い。

——腰をもつとのばして、お尻を後ろでふりふり振るのはよせ。中途半端な話はいらない、ほら、あ

そこから、ここに来るまでの間、もう、きみは笑いを作り出すこともしなくてすんでいる。

アゴにおびただしい数のホクロのあるひとりが言う。誰かは、知らないうちにほてっていた顔がズンズン冷えるのを意識している。みんなの影が少しずつ縮んでくると、誰かは放し飼いにされても、みんなと一緒になっていて、片腕でハンドルが投げやりに操られている車の中にいる。

——みつともない笑顔だ、笑くぼがアゴの下にずりおちている。汚い歯だなあ、歯と歯の間の虫食いの隙間に、ぼろくずになった言葉がひっかかっている。

誰かは衰弱して眩暈でもするみたいに、四方から八方、十六方に、彼らの倒れ込んでくる影の沁み込んだ顔をみている。

頬に空気を含んでホーツとひとふきすれば、たちどころに落ちてしまいそうな木の実が枝についたままだ。下を歩く人がいるとすれば、全部どもることになっている。眠っている者が魚のように積重なって、道路に投げ出され、押し寄せた波が引いていき、打ち上げられたのは、顔を無理に洗われて、いやいやをしているおびただしい数の赤ん坊だ。誰かは傷のために手を裏返しにして本をめくっている。誰かの一度も見たことのない自分の体のどこか、ともすると別の誰かと共有している部分がありそうな気がする。きつと螺旋で連なってふらふらする関係。

彼らは五人になってしまい、なにもかも裏側から見えるベンチにいる。木はカサカサした小枝まで見え、葉という葉は全部枝より上に出て、白っぽい裏を見せており、屋台の女は背を向けて立ち、メリーゴーランドは、ゆがんだ板で作った扉の向こうだ。眠りの残骸になった彼らはまるで蛇足の生を

生きてでもいるように、翼の中に鉛をつけた鳥になって並び、今日が一巡りしていった後ではないかと疑ってみたりする。しかし、その向こうに海があつて雲の影か、波か、沖の船が流した油か、紺色の海面に銀色の部分が、水溜りの形をくずさないで押し寄せてくる。

——嘘つきとは違う、あの時はどうも狂つたというか……。肩を叩かれたんだ。催眠術と同じだから、悪いようにはしないと云われて。

同じ問いと同じ答え、それ以上は無言だった。噛みついたが逃げられた。どこにいるか捜すことだ、始めこそ気違いじみた配慮が必要だったんだ。誰かは、歯切れのよい嘘をいって咳払いをしている。

——一つの命令のしわざだ。太陽も暗闇も怖くないらしい。あんまり有難いことじゃなかったという程度だ。その程度、いつもそっくりの結末だ。事件にもならない。支配欲と食欲はすさまじい。どうする。——全部の証拠が消されたところだ。こぼれているものも拭きとってしまう。どうせ掴めないだろう。証拠があつて天下にさらされてさえあれだ。もつと何か不気味に。決定的なものを掴んでいると思わせる。

——既に別の事実が真実より本物らしくなっている。仮面を剥ぐんだ。——剥げない。仮面が本物なんだ、密告したことは冒険でも何んでもなかった。ボタンを押せば自動的に動き出し処刑されるというものではない。壊れている、全部壊れたボタンだ。何もかも知っていて、すっかり話す誰かはいそうだ。いる。——いても見つからない。間接的な方法はないか。

——直接しかない。真正面から自首をすすめる。破れかぶれ、ふてくされたやりかただ。こちらら

催眠術的やりかたで追い詰められたと錯覚させる。——錯覚するはずがない、錯覚させるには権威がいる。書き方が問題だ。凄みをきかす。

——脅迫になるよ。——自首のすすめは犯罪にならない、他人にいいふらさない形なら、逐一反ばくするだろう。——いや、知らん顔だ、堂々としている。やましいところがあつて必死でかくすなら、それは見ものだが……どう書く、登記関係のからくりを突く。あれは決して偶然ではない。全部の事実の百分の一にもならないから役にたたない。こちらに向けて非合法的な圧迫を加えるだろう。大雑把な行動は思うつぼだが……。

——いまさら何の反応もあるまい。つるし上げるか？——飽きてしまった。奴らにたかをくくられている。何とかなるはずなんだが……。本当は気にしないで暮らせることなんだ。と言つては奴らが喜ぶ。——しかし努力を続けるのも馬鹿らしくもある。

海の向こうに、無数の消えない小粒の雲が現れ、風もないのに見るまに、こちらに向かつて変形し、伸びて肋骨状になる。肋骨は一体分ではなく数体連なつて空一面をおおいつくす。

——その人は潜んでいるの？ どこか辻褃があわれない、悪事の周囲は辻褃のあわれないものなのね。そうか。今はもう辻褃が合つて、変に合っているのね。もっと派手にまた動く時を待つ？

みんな狭い胸を暇つぶしに押し潰して、壁でも見る退屈さで海を見ている。

——どうにもならないな、お好きなように、僕らが犠牲を払うことはない。どうしたらいい、どうも、弱々しくなっている、食ふことだな……誰かは出来る限り、低いところまで手を下げている。近く

から見れば、赤味を帯びた手と、黄みを帯びた足に、柔らかい毛が生えていて綺麗だ。

——骨折り損？ 遊びと思えばどうなってもかまいやしない。息の詰る思いをしたい、心臓を貫いてやるなんてできないから、その程度で。それほど危険ではない？ 書くわ、わたしの字で。

—— 一気にぶち壊してしまふよ、何もするんじゃない、その開いたままにしている口元を閉じろ、上下の唇を重ねて前歯で噛んでおけ。

誰かは身を縮めると、足の裏から這い登ってくるかすかなシビレに気づく。腰掛けたまま、怠惰に片足だけを走り回らせ、長いアリの行列を踏み荒らすと、足はイカダに乗っているように、支えのないゆらぎかたをする。

ザア—という波と、ザブンという波が交互に襲う海は、耐えがたい臭気で此処まであがってくる。波の引いていった砂浜に残された、白くつぶれている無数の魚卵を、誰かたちが突つきまわしている。——これはフグの卵巣だ！ これを食べたら完全に死ぬ！ これだけあればわれわれ全員を殺すことができる。——やつらに、贈りつけるか、ピンクのリボンでもつけて！ ——しびれるだろうか？ 変調にぞつとし、驚愕した誰かが天を仰ぐと、突然現れた海鳥の大群が、空を充たし、泣きながら翼を広げ、羽を震わせはじめる。何かを訴えながら、いつせいに全身の羽が抜け落ち、皮だけで羽ばたき、羽を一面に振りまきつづける。

そこに置き忘れられた乳母車の上にも、白い羽が舞い降りる。乳母車のなかで、太股を横に開き、足を直角にまげて眠っている赤ん坊が、今ふっと消えてしまえば、それが全世界のような重要性をも

って話されるかもしれない。

誰かはばらばらにくる現在を見ている。たつたひとり離れて旅行するときの現在のよに、よどみなくきて、夢のなかでのよに、あばきたて、確信を与えるどぎつき。自然は確実に病んでいなのだ。

ホコリだらけの斜めに掛かった額の裏側に投げ込まれる書類から、秘密の命令がひん曲がって飛び出しつづけ、ときにたくらみを台無しにするため、トンネルになつて穴が開き、欲するまま、あの部屋とあの部屋を貫く。どんな怪しい人物もいて、それぞれ自分を数十倍にする武装をしている。誰かはそれを文章に置き直し、まるで祈りの言葉を読むようにゆっくり唱える。

——呪え！ われわれに必要なのは食い込んでいくネジの運動！ 眼を伏せるな！

誰かは何をしたらいいのか分らない、考えてみる。泣いているのは乳母車のなかの赤ん坊かも知れない。誰かはどんなことから、姿をくらませそうにはないし、どんな希望とも、どんな絶望とも親しくない。

上から見ると、市街がスリ鉢上に沈んでおり、海が一番高いところで、逆さにした帽子のツバのよに波うっている。かろうじて水が流れ込まないでいる市街の一番沈んだ中心点。各地からそこへ。ひとりならば、まあ仕方がない、後からついて行くのも悪くないと思うのに、グループとなるとそうはいかなくなり、彼らは追い越しのチャンスを狙うけれども、前に行く仲間に警戒されて、たえず遅れをとり、最後まで遅れを取戻せそうにない。

フロントガラスに前の車がびったり嵌り込んでワイパーが終始眼を擦って見せるので、なにか窮地

に陥りでもしたように気が気ではなくなる。あそこに山がある。ずっと前からある。ここは何処？ 前  
の車に続いて行くことで進行が成り行き任せになっているのかもしれない。日暮れに太陽が高くなる。

——地面が沈んでいくから？ 木が全部一方に傾いている林だ。地震があったのかな、あの家。

——車が滑り落ちていくから？

どこかを見定める目の前に、千切られたビラが飛び散る。

——また太陽が山の端まで距離を開いたが、この高さから下は時々垂直に、あつという間に落下して  
しまうこともある。日が暮れたら、チャンスがくる。前の車から大分遅れている、油断させ、ライト  
を消して一気に近づき抜き去るんだ……。

追い越しをすること以外、話の種はつき、それだけを言い合い、別の方法が考えられなくなると、  
誰かは隣の席の者に体をもたせかけ、体をもたせ掛けられた者は、その隣りへとリレーして体重を預  
けてしまうが、一番はしにしているのは、目立って綺麗な薄色のドレスの誰かなので、汚れたシャツ姿が  
遠慮してしまい、寄りかかる者の方へ逆に肩をもたせかけ、次の者も、その動作を反対の方へ送り返  
し、結局、一番始めに体をもたせかけた者が皆を支えるかたちになる。全部の者の重みを肩に引き受  
けた誰かは、母親の手の重みで安心する幼児のように眠りにおちる。

……お母さん、せめて五歳以上のニワトリは殺したらどうなの？ ……恐ろしい子だよ、お前は、  
利益追求の鬼だね、わたしは十五歳以上まで生かして見せますよ——。心にかかっているなにかが、  
誰かを引っ張る？ レストランの二階、ガラス張りの窓から、通路をいくカーニバルの踊りに見とれ

ていた誰かは、……見て見て！ 客の声で振り向く。……見て見て！ 皿の上に虹が、かかっているわ！ ほら、見て！ この銀貨位の半円だから、おかしくって、ほら、見て見て！！

——客のランチ皿の上に、陽光がさしこみ、油が流れているように虹色がきらめく。……チクショウ、あのババーだな、皿の洗い方が悪いんだ！ そばを慌しく通りすぎる店長が誰かの耳元でつぶやく。……すみません、すぐにとりかえますから！ ——アルバイトの誰かは皿を引き上げようとして、手元を狂わせる。揺すられて卓上においてあった銀貨が、音をたてながらガラス窓とガラス張りの壁の隙間に落ちていく。……違うつたら、美しいから、あんまり、綺麗だから、嬉しくなっただけなのに！ 銀貨は7枚あったのよ——女の客は泣き出している。透明なガラスの底で、銀貨は微妙な重なりを見せているのに、誰かたちには、どんなに策を弄うしても、もはや、銀貨を取り出すすべはない——。

みんなの背骨がなびき撓んでいるスキに、後ろから来る小型車が、やすやすと彼らの車と前の車を抜き去って行く。誰かは男物のシャツを着込み、丸みは目立たないが、誰よりも多くの回数、髪のを直し、目立った服を着ている誰かに横向きのまま注意を忘れない。

片側はヘッドライトをこちらにむけて、ずっと続く黄色い列、片側はテールライトの赤い列、道路は色分けされて車で埋まる。一度追突したら、衝撃が何台前方にまで伝わるか、想像以上に背からの圧迫をくいとめるには気力がある。ハンドルが手のなかにある誰かと、靴のなかに小石があるのではないかと疑っている誰か。具合の悪い何かを封じ込めるために、そう信じると言うような、辻褄の合わない信じかたで前の車を追い抜いて、一分早く着けばという計画は、突進し、脱出し、攪乱し、そ



の直前まで移行する。誰かがタバコを吸い始めると、両側から一本ずつ奪い、息の吹きかかる程顔をよせて、奇妙に守られるその顔。両側の顔が離れて、再び現れ、煙を鼻にのせた誰かの顔。目立った薄色の服の誰かは、手持ち無沙汰を続けた後、やっと好奇心をかきたてる現象にぶつかつたと言わんばかりに、三人の方を見、何かもつと色々理解し易い行動が三人に現れるのを待っている。

異様な臭気が何処からともなく入ってきて、誰かが顔を背ける、どうやらパチパチ車のガラスにぶつかっている碎片の臭いだ。道路の両側の下方は、ところどころにある照明で透かして見ると競馬場らしく、馬の蹴上げた馬草が、あたり一面飛び交っているらしい。こんな夜、たしかに道路の一方から一方へ横断するネズミ色の馬の列があつて、馬丁や警備員風の男が群がって大旗を振り、交通止めをしているのだ。前の車に遅れてしまう。既の続きが競馬場だ、その向こう、猛スピードで飛んでいくライトの列がある。

赤や黄の点や明るい窓がもてあそばれ、はすかいに動き、輪になつて崩れたり、近くなつたり遠くなつたり、浮かび上がり、上から下へ降りかかり黄や緑や赤の明かりが混じり合い、あらゆる直視を遮ろうと、前の車が闇の中を横転しそうに揺れていく。スピードを増した誰かたちは、ライトを全部消し去り、保護色になつて暗さの源に化け、恐れず真直ぐに突進し、透明な一陣の風のように前の車の横を突つ切つてしまう。バスの前のバス、その前のトラック、トラックの前のライトバン、全部が仲間の乗つた車らしく、限りなく続くばかり、風になつて突つ切つても突つ切つても、車の列の前に出れない。自分たちでさえ、行手を悪酔いさせるライトによつて忘却させられ、笛吹きに連れ去られ

るネズミの群れに変わり、何処に何をしに？　みんな夜が来たために顔を膨張させて、あたりを伺うことをやめ、徐々に眠気の涙に衰えてくると、いままでが、一種の怠惰になり、眠りはひよつとすると、めくらめつぼうに走りまわる。相手が停止しているわけではないから、遙に、実数よりもずっと長い列になって、追越を徹底的にさまたげる。それだけでなく誰かたちの背後から、夜に透明になった黒い車の限りなく長い長い列が、無灯火で疾走し、その列に追いかけれられ追突されそうだ。

——前ではない！　後ろだ！　後ろのやつらが、ぶつかるうってのか？　前だ！

車が次々激突して、暗黒な車の一群が突っ込み、手のなかで爆発し、足の下が吹き出し、目の前が二つに裂ける。それは、急停止したため地面に書きつけられた模様らしい。

まだ何一つ見えないのは、見える前の光におかされ、一瞬を飛び越え、全く別のところで赤い衝撃点を掴んで、濃縮した知覚にいるのかもしれない。足の下が飛び上がり、誰かの手が危うく海を掴む。

一台がさつと掻き消え、二台がさつと掻き消えたあとに流れ込む水のように、空いた場所に引き込まれ、次々同じ崖から墜落してしまふ。

誰かが曲がりくねった管の中から押し出されていく。ゆっくりと波打つ水のなかに、少しずつ囲みが外されていき、深さが黒ずんでいる。ところどころ波が光っても水は、夜の曇り空より明るくはない。誰かが恐さにふるえるのには遅すぎる。水が震えているのだ。

——ひとりがひとりぶんの浮力しか持っていないと思うこと。体、手、足、誰かのものと間違えそう。近いところから自分を見過ぎるから、自分と水が混じって区別が出来なくなってしまう。

誰かは逆さに岸を見て沈んでいく、浮き上がっても、どうしても沈んでしまう。だから仕方なく体の内側を階段にして登ることで浮き上がり、また沈みはじめると、内側の階段を登る。このやりかたを繰り返しているうち、辿りつくところまで流れていくだろう。誰かは誰かに掴まろうとするが、それは水に映った自分であるのか、手探りしても捕まえるのは水だけだ。何回転、手を動かしても、体の濡れ方がひどくなるばかり。黒い水の悪びかりする面を、大勢の口が開いて噛み、誰かの水にとけている指先まで噛み、フォームを忘れてしまった体を置き間違え、いままでになく孤立した不動から逃れられない。

水はどんな角度にも傾斜し、あるときは、逆さに流れがのぼり、あるときは斜面を一気に滑り込む。別の誰かはいくつもの運動を一度もしたことのないひねりかたで、次々繰り返し、少しでも黒い水にふれないで、ところどころにある鉛色の斑点に頭を突き出す。つぎに姿を消すと、ずっと離れた場所に身を収縮させてあらわれる。別の誰かは、いかにも冷静で、後ろを見、人が落ち葉のように散らばって浮いているものではないことを見る、ひとりの外に、もうひとりの輪郭が、そのひとりの外に、もうひとりが……まるで渦巻のように、木目のように見えている。それは反対に後ろに行くほど大きく見え、最後のひとりが、その前にいる全部を飲み込んでいる関係。ひよっとすると、人の重なりを水輪にしたまま没したりする。

あの時と同じだ。尻に冷たい水がしぶきをあげている。振り子になってゆれて、ゆれの往復とも、途中の滝のなかをザブリザブリとくぐっていた。ロッククライミング中に宙づりになったときの……。

振れて振れて。振り切れる度に散る水のしぶきが、ずっと下にいる人たちの方まで氷の粒に変化して飛んでいた。振れていたのは誰か、誰かだったけれど、耳の中がぬれて、奥歯がコチコチになって、舌の根がカラクなっている。水を呼吸して肺胞がヒクヒクする。あときのわたしと同じだ。あの時の誰かと……。誰かは拍子をとりながら死んでしまって、いまのわたしは大滝のなか、ちっとも拍子が取れない……。体の中の危険な部分を残して、そっと避難してしまうこと……。クシヤミをしてはいけない、出て行く出口が何処にあるの、考えなしにしたら、水滴になったわたしは飛び散り、周りの者も霧散する。

誰かの張りつめていた体の芯が、まるで真空であったように、周りの水が流れ込むと、その隣の誰かは反対に、前歯のところどころ欠けているために固く閉じていても開いている穴から、噴水のように細い水を何本も吹き上げて沈んでいく。体は役にたちはしない、中身があるにしても、ないにしても、とにかく押さえ込んでいる力が自分だったのに、誰かは、体の内側の階段を駆け登り続けるばかり、階段を押えられないからぐらぐらして止まらない。誰かのまわりには、誰かも、誰かも……。みんないる、誰かは潮をあげるクジラほどの水しぶきをあげて、この長い時間、泳ぎ続けている。自分の力しか信じられないから、力いっぱい水のなかに四肢のあとを彫りつけて、進んでいる距離をきざみつける。放心したふりをしてはいけない。本当にそうなる危険がある。この沼のような内海にも川が入ってきて沖まで伸びている。流れに注意しなければ……。うかつに岸に近づくな、やつらは投げ網で僕らを浚おうとしている。真剣に泳ぐんだ。泳ぐ？ 泳いでも結局流されているにすぎない、

一体どれほど僕らより安全なところにいるというのだ。両方の腕のなかで、掴みそこねた全部の水の記憶、両足で蹴りそこねた全部の水の記憶が、時間の蓄積になっている。泳ぐ者にとって、いたはずの場所の狂いが時間であり距離である、誰かと誰かは浮いているだけ……、こんな場所に於いて饒舌はない。

——やつらは八方から網を縮めてくる、あれは集魚灯だ、避ける！！

力のすべてを氾濫させて泳ぎ続ける幾人かの圧倒的な力の凱歌かも知れない、海に漂う全部が溺れているのでなければ……。誰かは水に身をまかすまま、底の方でなんとなく収縮していて、海水に開いたままの目にさわる、この水滴全部でいくつの虹をつくれるか……。誰かも誰かも瞬間ごととに生を忘れ、本質的な何かが崩れるが、どこかで釣り合いが取れているから沈みはしない。自分の被膜が、水の被膜が、特殊な溶け合い方で合致し、水面を脱出したところで拡がっているのかもしれない。互いに押し合い打ち消し合う波が、誰かのまわりをスリ鉢状になって騒々しく盛り上がっている。

そうぞうしい。これだけの人々の体熱で蒸発した海水は、何時か闇の空に乱れた雲になって這い登り、こぼれ落ち、落下の加速度のついた水滴が、強い垂直気流に捕まえられて、一直線に氷点下の高層まで上昇していき、また重みのために落下し、再び上昇気流に捕まえられ、上昇する。

登ったり、降りたり、登ったり、降りたり、往復を繰り返している間に、次第に大きくなって凍結し、重くなつて遂に上昇気流のなかを、突っ切る巨大なヒョウ粒になって落下する。

飛行機だ、ヘリコプターかも知れない。登ったり、降りたり、登ったり、降りたり。垂直気流のなかを、水滴のようにもてあそばれている。やつらの行きたくない方向に自然と行ってしまふ、突然の高度変化、裏返し、そのうちに機体に大きなゆがみがくる。雷はエンジンあたりから機体に入って、右翼から逃げたのになにごともない。まだ暗く固まっていて手が届かない、たいがいのは出来事は目の前に出現していない。

そうではない。一部は目の前で出現している。水という水は上昇気流に乗って這い登り、もはや海に水がない。真昼、赤茶色の泥盤の上に、巨大な網にかかった無数の車の残骸が打ち上げられている。干からびた海底にへばりついている者たちはすでにその状態に慣れきつたらしく無気力に見えるから、大地がかわりに、ギシギシする脈拍と呼吸を引き受けている。

すでに遅れすぎて、まわりにいた者たちが、死に果てたのか、誰かひとりに集中して、吸いきれないほどの空気を吸わせられ、吐きだすときは本当に胸を絞り上げられてしまう。だがやはり、誰かのほかにも誰かがいて、全身が動脈になったように、次々送り込まれる蛇動を、そのまま、地底に送り返すのに余念がない。

——そのうちに何かが化石になって現れるだろう。

あらゆることを誰も理解出来ず、何ひとつ話せない。奇怪な判読できない符号ばかりが、遠く近く、ブンブン羽音をさせて浮遊する。羽音の主は、地球全体の数よりも、数百倍も数が多く、もう未来に向かつての餌食として、人間の数が物足りないか、今から時間を遡って襲いつづけようとする。

何処でどんなことがあっても忘れ去らない、そらんじている生きる使命みたいなものがあって、ムツゴロウやハゼのように、腹這いしても集まっていく誰かたち。岸は高いから、誰かたちが積重なって踏み台をつくり、何処の誰か知らないひとりだが、無遠慮に歩いて通り過ぎて行ったあと、目を開くが、既に足がなく、上着がなく、頭がなく、堤防の向こうに没して見えない。誰かたちは赤茶色の小枝のように束ねられ、そこにいて、いつか煙をあげてしまうのかもしれない。

どんな大事件もすべて素早く片付けられてしまう、散らばったゴミの後片付けのように、何人何処で死んでしまおうと、生き残ろうと、テレビの画面そのものなのだ。

一瞬、消えてしまうと、何があったのか、もう一度見ようとしても、だれかが、何回チャンネルを切り替え続けたところで、何も現れはしない。何時でも、何処でも、写したいことしか写さず、言いたいことしか言わない。行為を保護し、無罪にし、苦痛を免除してしまう。

何もかも早すぎる。その誰かも、チャンネルをカチッと切り替えた後のように、いま占領されていたあらゆる事実から脱出して、別の世界で笑い転げる画面の新しい別の人物になりかわる。

突然ライトをつけた車が身動き出来なくなる、誰かは運転席に蹲って、とても近くを見ている。服の縫い目から切り忘れた長い長い糸が一本引き出され、ちよん切ろうとすると、縫い目が縮み、何処までも伸びてくる。

誰かはその糸にぶら下がって回転運動をしている、耳のわきをすさまじい風が通過し、素通りし、地球を一回転して同じ場所に戻る。一回転する度に地球をグルグル巻にしていく糸。

地面が陰電気を帯び、大気の高層は陽電気を帯びている中間の、火花を散す陽のセントエルモの火は紅色で羽のように柄がなく、陰のエルモの火は青い点だ。青い点ばかりが無数に落ちてきて、下を見れば白い。

誰かが車から降りていく前方、四、五メートル上をフワフワ行くのは地から分離して踊り出た死者の骨だ。行き先には、白さに保護されている木々や、家がある。雪が降って既に積っている。雪の下で凍え死んだツバメを踏んでいるのかも知れない。次第に深くなり、誰かは足首まで埋もれるが、雪の匂いにむせ、頭を下に傾け、歩き続ける。いつか誰もいなくなり、自分の足跡を辿って自分が歩いているように、足跡が二重になり三重になり、四重になり、誰かはひとりなのに、足跡だけが、膨大



な集団になって、なお沈黙し続けている。

誰かは歩いて行く。回りの白さの重みで雪は次第に密度をまし、それでも丈高くなっていき、すべての白さのなかに白があるのだから充ちていて、この場所が何処であつても、何億であつても、みんな足跡なのだ。

誰かは一足ごとに沈みながら、ルリ色のシジミ蝶を見たりする。次第に沈みかたが激しくなる、どこまで沈んでも、どこがおしまいということがない深み、引つ張り込む意外に力強い雪に腰まで沈むが、どうやら雪の密度にも大分狂いがあるようで、ある一步は雪の上に軽く載っている。しかしそれも偶然で、ほっと瞼にかかる髪を払うくらい地震で、またも陥ち込んでいる。とめどなくもぐってしまうと、ひとりですく脱け出るのに苦心する。誰かは崩れ易い雪のどこかの、塊らしいところを見つけて、掴み、穴の途中に足を掛けながら、その雪が崩れてしまわない程度まで、重心をかけるのを止め、素早く脱け出そうとする。いつか何処からともなく、雪の塊が、誰かの上に集中的に落ちてきて、それを避けることに誰かは夢中になる。

目に見えない白だけの世界に締めつけられてしまうと、誰かは久し振りに純粋な空気に巡り会って、平静な状態に引き戻される。

いままで空想的な死が一度も本当の死になったことのない誰かは、体験しない架空の未来を楽しんでいるらしい。さまざまな手のかたちで雪をかきむしり、冷たさで指先が鮮やかに紅くなるのを見つめ、身を躍らせて落ちてくる雪の塊を避け、雪穴に身をひそませる。誰かは、吠えながら飛び出して

きた犬に、告げる言葉を誤まっている。シツポの先だけ黒い犬で他の部分は白く、やはり雪に紛れ、迷い込んでいる。誰かは口の横で息をしており、犬は多分シツポの隣りで息をしている。いまは、ぼうつとした光のほか、たくさんの物音も物体もここにはないから、誰かは行き過ぎるほど遠くまで見える窓にいます。

長い間、白さのほかに何も見えないでいて、やっと、顕微鏡のなかに見えてきた細菌みたいに、真っ白い原を、長い隊列を組み、同じアノラックに身を固めていく誰かたちが見える、みんなが前をいく者の靴あとを忠実に踏むことを繰返して、只一つの靴跡が、その間隔で只一本続いて見える。

あまり冷たいからそうなる、みんな臆病だからそうなる、ほんのちよつとしたきっかけで続いて来いと言われたまま歩き始めて、理由もなくそうなる、途方に暮れているより次々足跡を辿った方が行き易い、雪の水色の塊を跳ね除け、雪の下になったものを掘り出している。雪はすべて、平原から浮き上がって、ふたたびそこに落ちていくから家は地上になく誰かは靄の中にいる。

全部影になってしまふ。暗さを手のひらですくった中から、白みを見つけようとするが見えず、音も何処かにありそうだが、奪い取られているという感じで聞こえない。懐中電灯をつける、雪が更に襲ったらしい、ガラスの向こうに白いものが層をなし、ところどころに、粉のようなアラレが隙を埋め、横段が、二、三本見えている。誰かは照明を消し、もう一度つける、舞台装置の裏側にいる侘しそうなガラス戸のなかの雪の層、戸は不動で確かなものになり、開くという機能をすっかり忘れ、何のためらいもなく閉じきって、誰かは小さい懐中電灯の光と顔を合せている。その顔と、不動の戸だ

けが暗闇に輝きでている。しかし戸は入り口であり出口だから、動き開く可能性を否定できない。長い間暗闇に対していて、暗闇の奥の、かあっと、真っ白い世界を、背景に意識している暗闇だから、よけい暗い。

誰かはずっと離れたところに灯をみる、それがわびしげに小さいほど遠くなごむ。ストーブの熱を最大にして戸にあてるが、何ごとも起らない。戸の向こうには、こちらからの熱よりも多量に、地球をとりまく寒気団の冷たさが、ぎっしりと全面的に押寄せているから、雪は全く後退する気配はなく戸は動かない。

誰かは次第に、すべてすんなりわかりでもしたように、すんでしまったこととしてくくり、別のところに片づけてしまう。家の中はすべて影で、誰かをしっかりと包んで離さないから、外界の存在は、ますます大きく拡がって行くばかりだ。そこは手の届かない、響きの伝わらない彼方であり、家は更に誰かを包み込んで小さくなって、音を窒息させ、断固として外界を否定してしまう。誰かはそれに反抗して、ストーブの炎の中に、着ている上着を入れ、次々手あたり次第につきこんでいく、炎は大きくなり何かが目覚めでもしたように、家の中を空気のように動き回る、床も天井も波うち始め、どこかが羽ばたき、にぶいつぶやきを発しはじめる。

この家のなかだって、何かが住んでいるだろう。こうやって、暖かくしておけば、ボウフラが明日湧いてくるに違いない。誰かは炎の揺らめきのなかで、どちら側にも跳び上がることが可能になって跳び上がるが、落下する時は怖くなって縮む。足許には踏みつけて跳び上がる台に使用した床が波打

って、板の隙間からゾロゾロ這い出してくる冬眠中の虫がいるのだ。誰かは跳び上がるのにつかった秒数の何分の一かで、あっけなく下に落ちるのは確実なのだ。敏感にも、もう落ちる地点を避けて、円形に虫たちが拡がっていく。

なにも触れていなかった誰かの体じゆうに、同時におこる接触。話しかけても返事をせず、何ひとつ言わないから聴覚障害であり、誰一人見ていないから、視覚障害であるから、誰とも親しくなりやうがないのに、ひとびとの触覚か、吸盤かわけのわからないものが絡み合って、またもこんなに押寄せてきて、群衆に体をはさまれ、誰かは歩きもしないのに死体のように持ち去られていく。

こんなところでは、ひとびとは誰もかも病気のように眠り続けており、夢をモグモグ反芻し続けている。ひとびとのもみ合う全部の体重が、誰かに向かって積重なり、耐え切れず。悲鳴を上げなければならぬはずなのだが、気づきもしないで紫斑ができ、裏側の背の細胞がほとんど死んでいると言うのに、今はもう、大気の重みと同じように慣れすぎて、つぶれる自分を忘れきっている。

誰かが群衆の流れの何時もと同じあたりに嵌り込み、移動すると、高い建物の一室が一種の引出しのように引き出されて、そこにしまい込まれる者が摘み上げられる。

ひとと、ひとの間からすり脱けてしまったところで、空気を掻き分ける手に、風圧が肉の厚い軟体動物に触れるようなブヨブヨの抵抗をするから、かえって恐ろしい。

少しずつ地から分離していった人々の跡を風がすうすう吹き抜け、路面に布でも敷いたような複雑なシワが揺らぎ、ひとの影絵が屈みこんで、白いシワのなかからつまみあげられる。それは魔術のよ

うに、蔓草が引き抜かれでもしたように、茎から茎が連なって、限りなくぶら下がったひとびとの群だ。

何処で誰が吊るしているのか見当のつかない空のずっと上の一角まで、無数の方向に枝分かれして空を充たす茎の短い節と言う節から出る根にぶら下がるひとびと。

しかし、何かが変わり、急に空一面、赤い線が縦横にさっと走り回れば、すべて煙もたてず、燃え殻になってしまう。もっと、際限なく誰かは反芻を望むが、燃え殻は地上に落ち、もう硬くて大きい空虚の玉が空を占領し、天と地の間に驚異は一つもなく、何の交叉もない。

燃え殻の白骨たちは立ち上がり、肉を着、皮膚を着、うぶ毛を着け、ちよっぴり汗をかいて服をつけ、みんな誰かたちに囲まれて流れ出す。手足、指、髪、体じゅうの表面だけ、さっと炎が走ったあとが。誰かは自分を小馬鹿にし、他人を小馬鹿にし、漸くそれで息をつく。

一分後、誰かは他人に成り変っており、一分後気晴らしをした後に危険に突き当たったように自分の足に躓いている。——どうして瘦せたのです？ 足のスネに縦の線が二本走っている、まさか、皮膚につきはぎができたのではないでしょうね？

書類もカードもみんな四角で、森坂春子、谷冬樹、水沢光、ととのった意味の名を書き込み名乗る。自然現象みたいに名はあるものだ。あわてていちどきに、誰も、灰色の混じった見覚えのある遠慮がちな表情で、腕や首を同じ姿勢に傾けていう。

——この隙間に落ち込んだあなたの七個の銀貨は、何十年後か、建物を建て替えるとき、取りだしてお返しするとお約束いたします。

……手の肌の三角のキメの荒さを見て、「1」から「100億」までの数字を打ち出し、しつこく付きまとう記憶でさえあちこちで連続が失われているのに、数字だけが何処までも途切れないで止まらなくなる。

際限のない拡散状態のなかで、じつと、中心を狙ってみても視線が非対称になったように定まらないのに、部屋のキイの大小数個の突起に引っ掛る錠の穴の手ごたえ、掴まれていて見えない手の真中の感覚が、ときに誰かの思いがけなく確かな根拠として発見されたりする。

完